NEWS

コアメンバー再編にあたって

仁木　宏（文学研究科教授，UCRC 所長）

21 世紀 COE の採択にともない，2002 年秋，都市文化研究センターが発足し，COE の事業推進担当者がコアメンバーとなってその運営に携わる体制が確立した。

2007 年 3 月の COE 事業の終了にともない，同年 4 月からは新しいコアメンバーによる UCRC の運営が開始された。この段階では，事業の多くは COE を継承するものであり，コアメンバーの過半も直前期の継続であった。新しい UCRC 所長には中川眞教授が就き，副所長（事務局長）は仁木がつとめた。

それから 4 年，UCRC の活動の一定の安定をうけ，事業推進担当者の新陳代謝と，新しい活動への挑戦のため，2011 年 4 月，コアメンバーの大幅な入れ替えをおこなった。

入れ替え後のメンバー構成の方針は，准教授の数が教授より多くなるようにすることであった。教授は，重点研究・都市問題研究や雑誌編集などのプロジェクト代表に限定した。またセンター会議（コア会議）では，各プロジェクトの単なる進行状況説明に終始するのではなく，学問的かつ創造的な議論をすることが申し合わされた。仁木が所長となり，佐伯准教授に副所長（事務局長）をつとめていただくこととした。

従来からの UCRC の諸事業の成果を引き継ぎ，若返ったコアメンバーの力でさらに積極的なプログラム開発や競争的資金の獲得に尽力してゆきたい。

都市文化研究センター（UCRC）の全体的な活動とスタッフ

佐伯大輔（文学研究科准教授，UCRC 副所長）

2007 年 4 月，都市文化研究センター（Urban-Culture Research Center，以下，センターと略）が新生して以降，センターでは，先端レベルの研究成果を生み出し，大阪市立大学大学院文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にするための活動を展開してきた。

具体的には，文学研究科における共同研究を主導するとともに，文学研究科に関係する大学院生，若手研究者に対して高度な教育・研究支援を行うこと，文学研究科教員に利便性の高い研究支援方策を提供することなどを目的としている。

そのため第一に，大阪市立大学の学内競争的資金である「重点研究」や「都市問題研究」に応募し，研究資金を獲得して多角的，機動的な研究活動を行ってきた。今年度新たに，1 件の「重点研究」（「都市の文化資源開発とその社会還元に関する萌芽的研究」，2011～2012 年度，研究代表者：増田聡），2 件の「都市問題研究」（「テレビ文化史・広告史アーカイブ構築についての総合的研究～旧萬年社所蔵資料による大阪の広告史研究を中心に～」，2011 年度，研究代表者：石田佐恵子，「大阪城学術総合調査のための基盤的研究」，2011 年度，研究代表者：仁木宏），及び 1 件の「新産業創生研究」（「手作り・アナログ時代の広告からの「感性価値」創造～旧萬年社所蔵資料からの再発見～」，2011 年度，研究代表者：石田佐恵子）に応募し，採用された。

さらに，G-COE に準ずる競争的資金である日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的若手研究者海外派遣プログラム」（「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」2011～2013 年度，主担当研究者：仁木 宏）に応募し，採択された。

大学院学生・OD など若手研究者に対する支援事業としては，国際発信力育成インターナショナルスクール（IS）を開催し，国際学会における英語での学術発表，国際学会誌への英文投稿などの技術力養成につくした。また，2009 年度末より採用された「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」（ROV）により，多数の若手研究者を海外に派遣し，成果を上げている。さらに，若手研究者に発表機会を提供するために，雑誌『都市文化研究』と，電子（英文）ジャーナル『UrbanScope』を編集・発行した。

また，UCRC ドクター研究員制度を継続し（「表　2011 年度ドクター研究員一覧」参照），学位取得の促進，研究環境の整備につとめた。さらに意欲的な研究員には，ドクター研究員プロジェクトによって研究資金を提供したり，科学研究費を申請するための技術的なアドバイスを行っている。企業・財団などによる研究・留学資金提供についても恒常的に情報提供してきた。なお，IS やドクター研究員制度は文学研究科以外にも門戸を開いており，学内他部局や学外よりの参加者も少なくない。

教員への研究支援策としては，科学研究費申請を後援する事業を今年度も実施した。最新の研究成果を市民に還元する事業として，上方文化講座を継続して開催した。

■スタッフ

センターの運営にあたる教員スタッフ（コアメンバー）は以下の通り。昨年度から3名増加した。（順不同）

所長：仁木 宏教授（日本史学）

副所長（事務局長）：佐伯大輔（心理学）

常任研究員：井上 徹教授（東洋史学），塚田 孝教授（日本史学），大場茂明教授（地理学），石田佐恵子教授（社会学），山﨑孝史教授（地理学），井狩幸男教授（言語応用学），久堀裕朗准教授（国文学），添田晴雄准教授（教育学），海老根 剛准教授（表現文化学），野村親義准教授（東洋史学），滝沢 潤准教授（教育学），増田 聡准教授（アジア都市文化学），祖田亮次准教授（地理学），佐賀 朝准教授（日本史学）

オブザーバ：中川 眞教授（アジア都市文化学），池上知子教授（心理学），湯浅恭正教授（教育学）

この他，ドクター研究員もスタッフとして研究活動に参加しており，研究履歴となる。

●センター会議の開催

第27回　2011年2月24日

第28回　2011年4月8日

第29回　2011年5月13日

第30回　2011年6月10日

第31回　2011年7月1日

第32回　2011年10月7日（9月2日に予定していたが台風の影響で中止）

第33回　2011年11月4日

●UCRCのホームページ

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/

国際発信力育成 インターナショナルスクール

海老根　剛（文学研究科准教授，常任研究員）

2011年度のインターナショナルスクールは，文学研究科予算に加えて全学の戦略的教育支援経費の助成も受け，以下の活動を行った。

(1) IS集中科目

大学院・学部共通科目「国際都市文化論Ⅰ」を三日間の日程で開催した。当初は2011年9月20日～22日を予定していたが，22日が台風による強風警報発令のため全日休講となり，急遽，23日に日程を振り替えて実施した。講師については，例年通り3名の外国人研究者を招聘した。従来の招聘講師による講義および若手研究者による研究発表に加えて，新たな試みとして，招聘講師によるレクチャー・ディスカッション（基礎的内容の講義）と修士課程院生を対象としたベーシック・プレゼンを実施した。プログラムは以下の通り。

9月20日（火）9:30～16:30

集中科目開催にあたって：井上　徹（大阪市立大学大学院文学研究科長）

講義　A Close Up View of Discussion: The Talk of Language Learners and the Structure of Interaction　デイビッド・マカルク准教授（神戸女学院大学，日本）

研究発表

Sant Cugat and Bernat Otger: Conflict, Relationship, and Territorial Policy in the Medieval Catalonia　村上司樹（都市文化研究センター）

A Statistical Analysis of the Fiscal Structure of *Licheng* District in Ming China, 1571　申　斌（東洋史学）

レクチャー・ディスカッション／ベーシック・プレゼン

9月21日（水）10:00～16:30

講義　Work Meaning and Work Culture in International Comparison　ピーター・クチンカ教授（イリノイ大学，米国）

研究発表

Vocabulary Learning through Captioned Videos　柳樂有里（英語英米文学）

An Analysis of Cooperative Behavior among Pigeons in Game Situations　北野翔子（心理学）

レクチャー・ディスカッション／ベーシック・プレゼン

9月22日（木）10:00～16:30

講義　Factors of Gender Expression through Fashion of Youths in Bangkok　スタダー・ワーキャン講師（チュラロンコン大学，タイ王国）

研究発表

What Consequences does Social Exclusion Bring on Socially Anxious People?　田中宏明（心理学）

A Study on Local Images of a Minority Place in Transition: through a Case Study of Utoro District, Kyoto, Japan　全ウンフィ（アジア都市文化学）

レクチャー・ディスカッション／ベーシック・プレゼン

(2) その他のプログラム

IS集中科目で研究発表する若手研究者を対象として「トレーニングプログラム」を実施，英文原稿作成，プレゼンテーション訓練，質疑応答のリハーサルまで英語による学術発表の基礎的スキルのレッスンを行った。また，修士課程の授業科目として「アカデミック・コミュニケーション演習」を実施した。

これらに加えて，「外国語論文校閲補助」，「ライティ

ングセミナー」，および「IS 日常化プログラム」（外国研究者による単発レクチャー）を実施した。

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

日本学術振興会が募集する「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に，UCRC を主体として申請し，採択された。

本プログラムは，国際共同研究ネットワークの核となる優れた研究者を育成し，わが国の学術の振興を図ることを目的としている。大学の国際研究戦略に沿って，世界水準の国際共同研究に携わる若手研究者を海外へ派遣し，様々な課題に挑戦する機会を提供する取組みが支援されるものである。

UCRC 申請の事業は「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」で，2011 年度～2013 年度の 3 ヶ年のプログラムである。2011 年 11 月に正式の採択通知が到来した。

担当研究者は，仁木宏（主担当），井上徹，松浦恆雄，平田茂樹，野崎充彦，塚田孝，佐賀朝，川野英二。この 8 名で，「頭脳循環」プログラム運営委員会を構成する。相手側の研究機関は，上海師範大学中国近代社会研究センター，（台湾）中央研究院近代史研究所，プサン大学校韓国民族文化研究所，ソウル市立大学校都市社会学科などである。

UCRC としては，本プログラムを一つの核として，若手研究者の人材育成と国際共同研究に取り組んでゆくことになる。若手研究者は，2011 年度中に 2 名を出発させ，2012 年度には新たに 3 名，合計 5 名を派遣する予定である。若手研究者は現地で研究・調査に従事することになる。派遣者決定にあたっては，「頭脳循環」運営委員会による選定を予定している。

共同研究は，Ⅰ「都市文化の形成と成熟」，Ⅱ「グローバル化のなかでの都市文化」という二つのセッションを軸とする。中国（台湾），韓国，日本における都市の歴史的形成，文化創造をめぐる比較研究を通じて，東アジア諸都市の歴史的形成のプロセスの全体像を解明する。日本と相手国でそれぞれ国際共同セミナー，個別セミナーを開催する。

・「頭脳循環」第 1 回運営委員会　2011 年 11 月 9 日（水）10:40～12:10　文学部会議室

国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム

添田晴雄（文学研究科准教授，常任研究員）

本プログラム採択の経緯，趣旨，運営体制については，本誌 13 号 123 頁を参照されたい。ここでは，平成 22 年度の派遣実績（本誌 13 号の記述と一部重複。13 号執筆時点で「予定」であったものには実績に応じて修正されたものが含まれる）と平成 23 年度の派遣実績および予定（平成 23 年 10 月現在で決定しているもの）を記載する。

平成 22 年度分の派遣は，カテゴリーⅠ（ポスドク以上，2 か月以上）として 4 名（松原仁美：フランス 71 泊，中谷 惣：イタリア 63 泊，佐藤 量：中国 71 泊，木村容子：イタリア 62 泊），カテゴリーⅡ（2 か月未満の調査研究等）として 7 名（今野泰三：イスラエル・パレスチナ 31 泊，信藤博之：オーストラリア 58 泊，野田はるか：ドイツ・フランス 14 泊，永田拓治：中国・台湾・韓国 37 泊，田原憲和：ルクセンブルク・ポーランド 12 泊，有田 豊：イタリア 9 泊，田中達也：オーストリア 11 泊），カテゴリーⅢ（学会，研究会等の発表・参加）として 21 名（高崎章裕：アメリカ 6 泊，岡戸香里：ドイツ 8 泊，王標：中国 5 泊，辻 高広：中国 0 泊，矢田尚也：アメリカ 4 泊，田端拓哉：アメリカ 4 泊，このほか，カナダ・ビクトリア大学英語センター・プレゼン研修には，8 月 29 日～9 月 12 日，岡田高志，寒川万里菜，清水美里，吉山博貴，李英熙，渡辺舞子，全ウンフィ，田中宏明，金邵引，佐伯綾那を派遣し，アメリカ・イリノイ大学における国際コロキアムには，3 月 7 日～3 月 14 日，濱道孝尚，石川 優，安江枝里子を，第 9 回都市文化研究フォーラム（タイ）には，3 月 2 日～3 月 5 日，丸山倫世を，第 9 回アカデミックフォーラム in ジョグジャカルタには，3 月 22 日～3 月 25 日，寒川万里菜を派遣した）であった（敬称略，泊数はプログラムにより支給される泊数のみ，以下同様）。

平成 23 年度分（平成 23 年度 10 月時点での決定分）の派遣は，カテゴリーⅠとして 5 名（北島由紀子：韓国 61 泊，白田由樹：フランス 61 泊，長谷川健一：ドイツ 61 泊，瀧本知加：61 泊，芝田江梨：60 泊，カテゴリーⅡとして 5 名（王静：中国 59 泊，金キン：4 泊，川口夏希：フランス 23 泊，池田一城：スペイン 7 泊，木戸紗織：ドイツ・ルクセンブルク 15 泊），カテゴリーⅢ（学会，研究会等の発表・参加）として 22 名（増井一弘：カナダ 4 泊，村上司樹：イギリス 3 泊，八木広大：アメリカ 4 泊，佐伯綾那：ブルガリア 6 泊，丸市将平：ドイ

ツ4泊，松田いりあ：ドイツ3泊，矢田尚也：アメリカ4泊，大澤裕美佳：アメリカ4泊，田中宏明：アメリカ4泊，このほか，カナダ・ビクトリア大学英語センター・プレゼン研修には，8月27〜9月11日，矢田尚也，八木広大，大山大樹，酒井陽子，丸市将平，西本幸志，佐々木和華子，畑 秀明，ケイン樹里安，北村尚子，段洋，劉鋭，慕雁芳を派遣）となっている。

なお，本取組の最新情報は，http://educa.lit.osaka-cu.ac.jp/~rov/index.html からアクセスできる。

若手研究者招聘事業

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

日本学術振興会が募集する「若手研究者招聘事業」に，UCRC を主体としてはじめて申請し，採択された。

本事業は，大学等研究機関による研究者交流を支援することにより，アジアを中心とした国々との研究者間のネットワークの形成・強化，当該地域における高度人材育成及び科学技術コミュニティの形成等をはかるものである。事業のサブタイトルとして，「東アジア首脳会議参加国からの招聘」とあるように，主に ASEAN 加盟国を交流相手国とする。

UCRC の事業の課題名は「アジア型都市創造性を確立する学術ネットワークと研究者の育成―文化・生態アプローチ」。メンバーは，仁木　宏（コーディネーター）の他，受入研究者として，海老根　剛，多和田裕司，中川　眞（文学研究科），飯野盛利，伊東　明（理学研究科）が就いた。

交流相手機関は，チュラロンコン大学，メジョ大学（タイ），ガジャマダ大学，インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校，ジャカルタ芸術大学，アンダラス大学（インドネシア），サラワク森林公社・サバ大学（マレーシア），デリー大学，ハイデラバード大学（インド）に及び，7月から10月にかけて18人の研究者を招聘する計画であった。

交流相手機関とはこれまで，UCRC や理学部附属植物園などとして研究交流を積み上げてきており，アジア固有の文化・植生を積極的に取り込んだ新都市像―アジア型都市創造性―の実践的な確立を目指して，人文研究，植物科学研究の融合を図るものである。具体的には，(a) 人文研究においては，アーツマネジメントの実践研究に焦点をあてた。これと (b) 植物生態学など植物科学を融合することで，住民・コミュニティ・生態系を基盤とする新たな都市学―地域研究の新領域を切り拓くことを目的とする。

・OCU 特別研究員（若手）選考委員会
　日時：2011年7月11日（月）14:40〜16:05
　場所：文学部会議室

相手先機関（現地）による選考・推薦を承け，招聘者の選考をおこなった。

・オープンワークショップのための打合せ会
　日時：2011年10月6日（木）14:40〜16:10
　場所：文学部会議室

・オープンワークショップ
　(1) 2011年10月27日（木）10:00〜16:00
　会場：学術情報総合センター
　(2) 2011年10月28日（金）10:00〜16:00
　会場：高原記念館

日本における研修成果を発表するとともに，アートパフォーマンスが行われた。

本事業は，双方向型かつ高密度の国際学術ネットワークを，現在の東アジア＋タイ＋インドネシアから東南・南アジア全域へと拡張する構想の一部をになう。本事業の推進にあたっては，都市研究プラザ，市大国際センターの全面的なバックアップを得た。

重点研究の活動Ⅰ

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学大学院文学研究科重点研究プログラム「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」は，2010年度まで井上 徹教授が研究代表者であったが，井上教授の文学研究科長就任にともない，仁木が代表を引き継いだ。また本プログラムは，当初，2008年度から2012年度までを研究支援期間とされていたが，大学執行部の新年度方針により，2011年度でとりあえずプログラムを終了することとなった。

ここでは，『都市文化研究』第13号掲載分（2010年11月まで）以後の活動について記載する。

(1) 2011年度の体制

2011年4月より，研究担当者を4つのチームに編成した。メンバーも若干，異動があった。文理融合を進めるため，理学研究科の教員に研究担当に入っていただいた。

チームⅠ［都市空間］　仁木　宏（日本史），塚田　孝（日本史），平田茂樹（東洋史），岸本直文（日本史）
チームⅡ［移動と交流］　佐賀　朝（日本史），川野英二

（社会学），早瀬晋三（東洋史），野村親義（東洋史）
チームⅢ［情報と文化］　松浦恆雄（中国語・中国学），久堀裕朗（国文学），石田佐恵子（社会学）
チームⅣ［文明と環境］　井上　徹（東洋史），大黒俊二（西洋史），木村義成（地理学），伊東　明（理学研究科生物地球系専攻），臼杵克之助（理学研究科物質分子系専攻）

(2) 研究会・シンポジウムの開催

・第 2 回萬年社コレクション調査研究プロジェクト報告会

日時：2010 年 12 月 4 日（土）13:30〜16:30
会場：大阪市立大学文化交流センター大ホール
主催：大阪メディア文化史研究会，大阪市立大学，大阪市立近代美術館建設準備室
共催：京都精華大学
司会：菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室）
①土屋礼子（早稲田大学）「萬年社コレクション調査研究プロジェクトの経緯について」
②竹内幸絵（大阪市立大学）＆牧浦裕介「萬年社コレクションの紙・印刷資料の概要と整理状況」
③石田佐恵子（大阪市立大学）＆畑　洋子「WEB データベース公開，ラジオ CM の文字化作業」
④石田佐恵子＆山川達也「テレビ CM のデジタル化と目録データベースの作成」
⑤土屋礼子「萬年社コレクション調査研究プロジェクトの今後の課題」

・小円座「比較都市史へむけて」（シンガポール大学との学術交流）

日時：2010 年 12 月 11 日（土）13:00〜17:00
会場：大阪市立大学文学部会議室
主催：近世大坂研究会，文学研究科重点研究，GCOE 都市論ユニット
報告：ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学）「二つの御用と弾左衛門支配」
コメント：横山百合子（帝京大学），グエン・ハ・グエン（シンガポール国立大学・院生），塚田　孝（大阪市立大学）

・小円座「比較都市史へむけて」（上海大学との学術交流）

日時：2010 年 12 月 12 日（日）15:00〜18:00
会場：大阪市立大学文学部会議室
主催：中国近世近代史研究会，近世大坂研究会，文学研究科重点研究，GCOE 都市論ユニット
報告：張智慧（上海大学）「上海事変と上海自由都市計画始末」
コメント：上田貴子（近畿大学）

・円座「近世都市における流通・運輸と身分的周縁」

日時：2011 年 1 月 10 日（月・祝）9:40〜17:00
会場：大阪歴史博物館第一研修室
主催：近世大坂研究会，文学研究科重点研究，GCOE 都市論ユニット，都市史研究会＋とらっど 3
問題提起：八木　滋（大阪歴史博物館）「都市大坂における市場社会」
報告：西本菜穂子（大阪市立大学 GCOE 研究補佐）「都市大坂における質屋仲間」，島﨑未央（大阪市立大学大学院院生）「都市大坂と油仲間」，原　直史（新潟大学）「新潟湊をめぐる米穀流通」，後藤雅知（千葉大学）「近世上総養老川舟運と岩槻藩」，山田俊幸（東京大学大学院院生）「尾張藩をめぐる諸廻船と問屋」

・第 2 回関西比較中世都市研究会

日時：2011 年 1 月 28 日（金）19:00〜21:30
会場：大阪市立大学文化交流センター　小セミナー室
報告：山崎覚士（東洋史・佛教大学）「中国港湾都市と「外国文化」」
コメント：高田良太（ヴェネツィア海外領土史，日本学術振興会特別研究員）
司会：仁木　宏

・大阪市立大学都市文化研究センター・釜山大学校韓国民族文化研究所第 1 回合同シンポジウム「都市と文化創造　―歴史，そして現代文化―」

日時：2011 年 2 月 9 日（水）
会場：高原記念館学友ホール
【第 1 セッション】「都市・植民地をみる眼」9:30〜12:40
○Lee Jaebong（李 在奉）＜韓国文学＞（釜山大学校人文大学・副教授）「1930 年代‘京城’を見る二つの視線」 ―田中英光の『醉いどれ船』―
●本岡拓哉 ＜地理学＞（大阪市立大学都市文化研究センター・ドクター研究員）「都市マイノリティの場所の記憶―在阪済州島出身女性たちの祈りの場「龍王宮」をめぐって―」
○Choi Youngho（崔 永鎬）＜国際關係史＞（靈山大學校外國語大学・教授）「解放直後在日朝鮮人の目に映った釜山」
●佐賀　朝 ＜都市史＞（大阪市立大学大学院文学研究科・准教授）「近代大阪の都市社会構造―1920〜30 年代を中心に―」
共通討論　モデレーター：野村親義（大阪市立大学大学院文学研究科・准教授）
【第 2 セッション】「文化創造のインパクト」14:00〜17:10
○Son Eunha（孫 銀河）＜映像工学＞（釜山大学校韓国民族文化研究所・教授）「芸術創作活動と都市イメージ」

●海老根 剛 ＜表現文化学＞（大阪市立大学大学院文学研究科・准教授）「コミュニティはどこに？―アートによる都市再生の可能性―」
○Shin Nakyung（辛 那炅）＜美学＞（釜山大学校・韓国民族文化研究所・専任研究員）「文化イベントと都市再生」―韓国国際ビエンナーレをめぐって―
●高島知佐子 ＜アーツ・マネジメント＞（大阪市立大学都市研究プラザ研究員）「民俗芸能による地域文化・地域コミュニティの再構築」
共通討論　モデレーター：中川　眞（大阪市立大学都市文化研究センター長）

・第 3 回関西比較中世都市研究会

日時：2011 年 3 月 11 日（金）19:00〜21:30
会場：大阪市立大学文化交流センター　大セミナー室
報告：大黒俊二（西洋史・大阪市立大学）「都市は一体か？」―西洋中世都市の「一体性神話」をめぐって―
コメント：高谷知佳（法制史・京都大学）
司会：中谷　惣

・中国近世近代史研究会「辺境都市を考える ―都市広州と羅定城―」

日時：2011 年 3 月 19 日（土）13:30〜17:30
会場：大阪市立大学文学部会議室
主催：中国近世近代史研究会（大阪市立大学），科研費プロジェクト「珠江デルタの城郭都市に関する文化的考察」，同「近世大坂の「法と社会」―身分的周縁の比較類型論にむけて」
共催：重点研究
報告：陳大遠（羅定市博物館副研究員　前館長）「16 世紀における中国南部のヤオ族征服と広東羅定直隷州の設立」，梁敏玲（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　研究生），「清代における都市広州の城防」
調査報告：井上　徹（大阪市立大学）「羅旁地方調査記録（2010 年 12 月）」

・第 5 回関西比較中世都市研究会

日時：2011 年 7 月 29 日（金）19:00〜21:30
会場：大阪市立大学文化交流センター　小セミナー室
報告：佐藤公美（西洋史・ミラノ大学）「中世後期アルト・アディジェ（南ティロル）の山間都市網と政治社会」
コメント：米家泰作（歴史地理学・京都大学）

・国際円座「訳語問題から近世社会を掘り下げる」

日時：2011 年 7 月 30 日（土）　13:00〜17:00
会場：大阪市立大学経済学部第 4 会議室
主催：近世大坂研究会，都市問題研究「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」，大阪市立大学都市研究プラザ GCOE 都市論ユニット
趣旨説明：塚田 孝（大阪市立大学）
問題提起：ダニエル・ボツマン（イェール大学），ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学），ジョン・ポーター（大阪市立大学 都市研究プラザ）
司会：佐賀 朝（大阪市立大学）

・明清史夏合宿 2011

日時：2011 年 8 月 10 日（水）〜8 月 12 日（金）
会場：聖護院の宿坊御殿荘（京都市）
第Ⅰ部　若手研究者の報告　8 月 10 日午後
田由甲「明清時期，福建沿海地域における「境」」，辻原明穂「明代督撫幕府の変種「督師幕府」―揚州督師史可法幕府を例に」，李侑儒「明清城市報時系統的轉變―以鐘樓為考察中心」
第Ⅱ部
第 1 セッション　明清都市　8 月 11 日午前
井上　徹（大阪市立大学）　趣旨説明
新宮　学（山形大学）「洪武の都，南京城の景勝」，巫仁恕（台湾中央研究院）「從消費來看明清江南城市的空間變遷」，夫馬進（京都大学）「『巴県档案』に見る清代重慶の都市と訴訟」
第 2 セッション　日本都市史の研究成果　8 月 11 日午後
仁木　宏（大阪市立大学）「16 世紀日本における都市の展開―港町・宗教都市・城下町―」，吉田伸之（東京大学）「伝統都市の分節構造―日本前近代の城下町を素材に」，塚田　孝（大阪市立大学）「日本近世における都市法と身分的周縁」
第 3 セッション　研究状況とコメント　8 月 12 日午前
妹尾達彦（中央大学）「中国都市史における近代とは？―唐宋史研究の立場から―」，吉澤誠一郎（東京大学）「中国近代都市史からのコメント」
総合討論

・第 6 回　関西比較中世都市研究会

日時：2011 年 10 月 14 日（金）19:00〜21:30
会場：大阪市立大学文化交流センター　小セミナー室
報告：天野忠幸（日本史・関西大学）「中世後期大阪湾の港湾都市と宗教勢力　―尼崎を中心に―」
コメント：向　正樹（東洋史・大阪大学）

(3) 個別研究プロジェクトなど

・年度末重点研究報告会

2011 年 3 月 18 日，大阪市立大学文学部会議室

・山下敦弘監督講演会・映画上映会

日時：2011 年 7 月 8 日（金）
会場：大阪市立大学学術情報総合センター 10 階 大会議室
主催：大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学専攻

共催：大阪市立大学大学院文学研究科，UCRC
映画上映『どんてん生活』（16 ミリ，90 分）
山下監督講演会　トークショー，および質疑応答
山下敦弘監督，鄭琮樺（韓国映像資料院），野崎充彦（アジア都市文化学専攻）

・チームⅣ研究会

第 1 回　2011 年 9 月 10 日
報告：大黒俊二（大阪市立大学）「森は恵みか？―乾燥化理論，森林水源枯渇論，「森の島」―」，木村義成（大阪市立大学）「地理情報学とは？」，井上　徹（大阪市立大学）「中国における開発，環境，文明の普及」，伊東　明（大阪市立大学）「熱帯雨林の生態学的研究」，臼杵克之助（大阪市立大学）「生態系における情報伝達を担う有機化合物」

第 2 回　2011 年 10 月 17 日
大黒俊二（大阪市立大学）「ヨアヒム・ラートカウ『自然と権力』について」

第 3 回　2011 年 11 月 14 日
木村義成（大阪市立大学）「考古学分野における GIS の利用」

(4) 出版

・大阪市立大学都市文化研究センター編『＜大阪市立大学文学研究科叢書 7＞都市の歴史的形成と文化創造力』清文堂，2011 年，総 293 頁
・早瀬晋三編『イギリス東インド会社「マカッサル商館文書」（1613-67 年）』大阪市立大学大学院文学研究科，2011 年，総 509 頁
・萬年社コレクション調査研究プロジェクト編『萬年社コレクション調査研究プロジェクト 2010 年度報告書』大阪市立大学，2011 年，総 176 頁

なお，従来の重点研究の報告書のうち，下記の 3 点をデジタル化し，Web にアップした。
・国際シンポジウム報告書『往来する都市文化―《断片》から探るアジアのネットワーク』
・日中芸能研究交流会報告書『日中伝統芸能競演会　研究交流会報告書』
・『大阪市立大学・上海師範大学共同セミナー成果報告書』
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/index.html

(5) 重点研究外部評価委員会

2011 年 3 月 22 日，重点研究外部評価委員会を開催し，外部評価委員の岸本美緒氏（お茶の水女子大学文教育学部）より，本研究プロジェクトに関する外部評価を受けた。

(6) 文理融合型共同研究

複合先端研究機構の重点研究「都市環境の再生に向けた戦略的新展開」（代表：橋本秀樹）との間で文理融合型共同研究の可能性について協議を開始した。2010 年 5 月 24 日に第 1 回協議を行って，今後の方針について話し合い，2011 年 3 月 18 日に研究交流の場を設けた。これが，2011 年度のチームⅣの創設，理学研究科教員の研究参加につながった。

〈2011 年度重点研究運営会議〉
第 1 回　7 月 29 日（金）14:40〜16:10
第 2 回　9 月 7 日（水）10:30〜12:00
第 3 回　10 月 14 日（金）10:40〜12:10
第 4 回　11 月 4 日（金）10:40〜12:10

重点研究の活動Ⅱ

増田　聡（文学研究科准教授，常任研究員）

文学研究科では，かねてからドクター研究員や大学院生より，他専修の教員や院生を交えた研究交流の場が欲しい，との要望があった。これを受け，都市文化研究センターが主催する専修の枠を越えた文学研究科構成員の交流と，共同研究のシーズ開発を目的とする定例研究会の必要性が認識され，平成 23 年度の重点研究として申請するはこびとなった。この申請は重点研究 B（新規）として採択された。
代表：増田　聡
共同研究者：佐賀　朝，野村親義，佐伯大輔，滝沢　潤，祖田亮次，久掘裕朗，海老根 剛

1　研究概要

プログラム名称「都市の文化資源開発の環境整備に関する萌芽的研究」
［目的］
文化資源 Cultural Resources とは，人文学の多様化と学際化に伴って近年注目を集めるようになった概念である。文字資料のみならず写真，映像，音響，景観などを包括し，既存の学問分野を横断して人間と文化の関係を新たな角度から捉えるこの概念は，人文学の研究対象に対して，それが潜在的に持つ社会的次元（アーカイブや文化政策，観光資源などへの応用可能性）にとりわけ焦点をあてるものである。
都市は文化資源の宝庫であり，人文学は都市をさまざまな角度から切り取ってきた。本学文学研究科が行って

きた様々な都市文化研究は，歴史学，社会学，地理学，文学などの学問分野固有の観点と方法によって，都市の多様な姿を明らかにしてきた。しかしそれら都市の人文的側面は，あるときは歴史事象として，あるときは空間的構造として，またあるときは都市に住まう人々の生み出す文学や芸術として，各々の学問分野の関心に応じた部分として扱われてきた。

これら都市の多面的な所産を，包括的かつ社会的次元より「文化資源」として捉えなおすことで，人文学が貢献しうる新たな都市研究の可能性が現れる。観光振興，都市アイデンティティの確立，都市の文化政策などの基盤として，都市の文化資源研究とその開発は必須の学的作業であり，人文学はその不可欠の基礎研究として位置づけられよう。都市の文化資源開発を掲げる本研究は，文学研究科がこれまで蓄積してきた諸学問分野の観点からなる都市文化研究を，都市科学の文化的側面の基盤研究として再編することを目指す。

また，都市において遂行される人文学研究それ自体も重要な文化資源であることは言うまでもない。いわば文学研究科構成員の日常的な研究活動は，都市・大阪の文化資源開発そのものであるが，その振興のために最も必要なものは，研究予算そのものというより，研究予算申請書の作成や事務処理や連絡会議のために費やされる時間や業務負担など，人文学における貴重な研究リソースの空費を極力回避するための方策であることは明らかである。本研究の目的は，都市の文化資源開発を単に理論的／机上の水準にて行うことだけにあるのではなく，われわれが置かれた研究環境それ自体に存する，都市の文化資源開発を阻害する諸問題を実践的に解決し，より広い社会的次元での活用可能性を追究していくことに向けられている。

［研究内容］

(1) 文学研究科構成員（教員・研究員・大学院生）が個別に行っている個人研究活動を，都市の文化資源開発の観点から包合し，相互に関連させ社会的次元へと接合する理論的体系を構築する。

文学研究科都市文化研究センター（UCRC）定例研究会を継続的に開催し，歴史学，地理学，教育学，心理学，文学研究，表象文化論，芸術学など，文学研究科を構成する個別学問分野の観点よりなされてきた都市研究の蓄積を精査するとともに，学際的な討議と検討によってそれらの接合可能性と社会的次元を明らかにする。観光開発や文化政策，研究成果の社会還元等の観点から，従来の都市研究の諸成果を都市の文化資源開発の観点から再検討し，その活用可能性を探る。

(2) 文学研究科構成員の研究活動を都市の文化資源開発として捉え，その促進，プロモーションについての実践的な研究をおこなう。

文化資源の観点から活用可能な文学研究科内の研究シーズを調査するとともに，個々の研究活動を促進し社会還元へと接続するためのプロモーションを検討する。文学研究科教員が参画する都市研究プラザのプロジェクト（船場アートカフェ）や，文学部学生によるアートマネジメントプロジェクト（ギャラリーりてら）とも連携し，公開研究会・公開講座・アドバイザリー活動・展示など，文化資源の社会還元を目指す実践研究を試みる。さらに，文化資源研究を志向する若手研究者を研究補助スタッフとして採用しノウハウを教育に還元するとともに，文化資源を開発し社会還元を行う人材養成を目指す。

2　研究計画の実施

本研究の採択後，原則月1回最終金曜日に開催される「文学研究科・研究カフェ」を開始した。文学研究科・研究カフェは，専門的な研究会として位置づけられるのではなく，各々が取り組む専門的な研究活動とは別に，文学研究科に所属する院生・研究員・教員が，互いの研究について気軽に語り合い意見を交わすことで，以下の三点の目的を達することをねらうものである。

(1) 自分が現在取り組んでいる研究テーマの重要性や面白さを他領域の研究者に伝える
(2) 他領域の研究動向と自分の研究テーマとの接点を探り共同研究のシーズを探る
(3) 院生，研究員，教員の立場にかかわりなく，文学研究科に所属する研究者相互の研究交流を行う

また文学研究科・研究カフェの諸業務を統括するリサーチ・アシスタントとして，松井広志（UCRC研究員，社会学D2）があたり，研究会の企画・運営・広報に携わっている。

12月時点までの開催内容は以下の通りである。

第1回研究カフェ

日時：2011年9月30日（金）16:30〜18:30
会場：大阪市立大学文学部　情報編集室
内容：松井広志（社会学D2）「ポピュラー文化におけるモノと集合的記憶―模型・フィギュア・モニュメント」，久堀裕朗（国語国文学教員）「人形浄瑠璃史における淡路座」

第2回研究カフェ

日時：2011年10月28日（金）16:30〜19:00
会場：大阪市立大学文学部　情報編集室
内容：田中宏明（心理学D1）「なぜ，ひきこもりが起こるのか？―集団から排除された人々の示す反応についての検討―」，祖田亮次（地理学教員）「多自然川づくりとは何だったのか？―1990年代以降の河川行政の転換」

第3回研究カフェ

日時：12 月 2 日（金）16:30〜19:00
会場：大阪市立大学文学部　情報編集室
内容：有田豊（フランス言語文化 D2）「宗教改革以降のヴァルド派の集団意識―起源に関する独自的伝承を中心に」，佐伯大輔（心理学教員）「報酬の価値割引」

また，研究カフェでの報告内容と討議の概略は，UCRC ウェブサイトに順次掲載される予定となっている。

都市問題研究の活動 I

大場茂明（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学大学院文学研究科都市問題研究プロジェクト「『住みごたえのある町』をつくる―大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント―」は，平成 21 年 6 月に採択された（研究助成期間は平成 21 年度〜23 年度の 3 ヶ年）。

このプロジェクトは，専門分野を異にしながらも都市文化や市区再生に関心を持つ日独双方の研究者が集い，大阪市立住まい情報センター，ハンブルク市都市更新・都市開発公社（steg）と連携しつつ，様々なアクターが関与する文化活動基礎に置いた具体的な「まちづくりモデル」を提案することを目的とするものである。

〇研究メンバー

代表：大場茂明(地理学)
共同研究者：北村昌史（西洋史），高梨友宏（哲学），久堀裕朗（国文学），海老根剛（表現文化学）（以上，文学研究科教員），ガブリエレ・フォークト（ハンブルク大学），ディルク・シューベルト（ハンブルク・ハーフェンシティ大学），ハンス・ヨアヒム・レスナー（steg：ハンブルク市都市更新・都市開発公社代表），クルト・ラインケン（steg 不動産部門責任者）

〇研究実績と今後の予定

・2011 年 4 月 26 日　第 1 回研究打ち合わせ
・2011 年 5 月 24 日　第 2 回研究打ち合わせ
・2011 年 7 月 9 日　舞洲清掃工場見学会
・2011 年 7 月 19 日　第 3 回研究打ち合わせ
・2011 年 9 月 2 日　第 4 回研究打ち合わせ
・2011 年 10 月 18 日　第 5 回研究打ち合わせ

11 月初旬には，北村，高梨，海老根と木戸紗織（大学院・独文 D3），丸市将平（大学院・地理 M1）の 5 名がハンブルクを訪問し，ハンブルク大学，ハンブルク・ハーフェンシティ大学，steg の協力のもと下記の事業を行った。

・2011 年 11 月 1 日
国際シンポジウム「“Stadtteil mit Gemütlichkeit” zu gestalten ― Area Management in Osaka und Hamburg」の開催(於：ハンブルク・ハーフェンシティ大学，参加者：約 20 名)

＜プログラム＞

1. KITAMURA, Masafumi: Stadtteilentwicklungsgeschichte von Kujo und ihre Umgebung
［コメント：ディルク・シューベルト］
2. TAKANASHI, Tomohiro: Über die Hundertwasser-Architekturen in Stadt Osaka―deren gegenwartige Lage und Aufgaben―
［コメント：クルト・ラインケン］
3. KIDO Saori: “Stadtteil mit Gemütlichkeit” fur Jungen: Wohnen, Arbeiten und Vergnügen
［コメント：ハンス・ヨアヒム・レスナー］

パネルディスカッション
司会：ガブリエレ・フォークト，海老根 剛
通訳：海老根　剛，クリストフ・ミットマン（ハンブルク大学）

・2011 年 11 月 2 日
ハンブルク・Wilhelmsburg 地区（IBA プロジェクト），Altona “Grosse Bergstrasse” 地区の都市文化プロジェクト（IKEA と共同）を見学
・2011 年 12 月 6 日　ハンブルク出張報告会
・2012 年 3 月 4 日　公開フォーラム「『住みごたえのある町』をつくる〜映像で見るハンブルクのまちづくり〜』(予定)

ハンブルクでの国際シンポジウムならびにハンブルク再生事業地区にて撮影した映像を紹介するとともに，この 3 年間の研究成果を報告する（共催：大阪市立住まい情報センター，於：大阪市立住まい情報センター・研修室)。

なお，10 月以降には 3 年間の共同研究の成果のとりまとめについて議論を重ねた。

都市問題研究の活動 II

塚田　孝（文学研究科教授，常任研究員）

今年度は，2010 年度から 3 ヶ年にわたって認められた大阪市立大学都市問題研究プロジェクト「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」（研究代表：塚田孝）の 2 年目であった。

研究代表の塚田のほか，昨年度同様，佐賀 朝（文学

研究科），谷 直樹（生活科学研究科），飯田直樹（大阪歴史博物館），八木 滋（大阪歴史博物館），渡辺祥子（近世流通史），岩本 馨（京都工芸繊維大学），ダニエル・ボツマン（イェール大学），ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学）が共同研究者として加わり，研究実施体制を組んでいる。日常的には，塚田・佐賀・八木が運営事務局を構成し，若手研究者（PD）や院生の協力も得て事業を進めている。

本研究は，**近世都市大坂の豊かな歴史像を，具体的な史料の解説を通して提示するテキストの開発**を目的としている。その対象は，学生及び博物館利用者（外国人を含む），さらに広く市民を想定し，**本学での共通教育や博物館の市民向け講座のテキストとして利用する**ことを意図している。

今年度は，昨年度に作成した『史料から読む近世大坂〔基礎編〕』《試行版》をテキストとして，共通教育「歴史のなかの大阪」（塚田担当）や大阪歴史博物館古文書講座「史料から読む近世大坂」（連続5回：担当八木・塚田・佐賀）で実際に使用し，その改良をはかっている。これらの改良点を踏まえ，また応用編として計画している《仲間編》で取り上げる項目のうち数項目を統合して，今年度中に《試行版バージョン2》を作成するべく計画を進めている。

なお，本プロジェクトと連携して，大阪歴史博物館において特集展示「古文書からみる大坂の町」（2011年10月5日～12月5日：担当八木）が開催された。

昨年度，海外へ向けた発信についても検討していたが，その中で，今年度の重点として英語版テキスト作成に向けて訳語問題に取り組む必要性が自覚された。そこで，本年7月30日に海外の研究分担者を招聘して国際円座「訳語問題から近世社会を掘り下げる」を開催した。この円座では，塚田が趣旨説明を行い，ダニエル・ボツマン「訳語問題から近世社会を掘り下げる」，ティモシー・エイモス「日本近世史と翻訳」，ジョン・ポーター（大阪市立大学 都市研究プラザ）「近世大坂の非人史における訳語問題」の3本の問題提起を受けて，共同討論を行った。この国際円座の成果は，本誌に掲載されている。

さらに，2012年3月にアメリカ・イェール大で研究分担者（ダニエル・ボツマン）のプロモートによって，英語圏日本史研究者の参加する国際円座を計画している。

これらの取組みは，まずは歴史用語や史料用語（例えば，「町」，「仲間」など）の訳語の問題についての検討であるが，これを通して単純には翻訳不能な事象が頻出し，適切な訳語を共同で検討することが歴史像の掘り下げにつながること（我々日本人の日常感覚ではすり抜けてしまうような問題群の発見）が自覚された。

以上の研究遂行のため，以下の会議・研究会を行った。

2011年
4月17日（日）運営事務局会議（拡大）
5月14日（土）運営事務局会議（拡大）
6月15日（水）運営事務局会議（拡大）
6月25日（土）運営事務局会議（拡大）
7月13日（水）運営事務局会議（拡大）
9月 1日（木）運営事務局会議（拡大）
10月22日（土）運営事務局会議（拡大）
11月10日（木）運営事務局会議（拡大）
11月24日（木）運営事務局会議（拡大）
12月10日（土）運営事務局会議（拡大）
12月21日（水）近世史研究会（《試行版》内容検討）・運営事務局会議（拡大）

2012年
1月18日（水）近世史研究会（《試行版》内容検討）・運営事務局会議（拡大）

都市問題研究の活動Ⅲ

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

2011年度新規の都市問題研究プロジェクトとして「大阪城学術総合調査のための基盤的研究」（研究代表者＝仁木）を申請し，採択された。但し，本年度の都市問題研究は単年度のみの募集であり，本研究も1年間の短期プロジェクトである。

本研究では，①文献研究，建物指図の再検討，発掘調査・ボーリング調査など，過去の調査研究の成果を集成するとともに，②石垣石材，ボーリング調査資料などを最新の科学的方法をもちいて分析する。また，③独自に測量調査，地中物理探査をおこない，GISによってデータ集約することで，大阪城の構造研究の新しいモデルを構築し，「大阪城学術総合調査」（仮称）実現に向けての基礎条件をかためることを目的としている。

なかでも中核となる地中物理探査は，現存天守閣南側の広場を中心に実施する。絵図の比較検討，過去の発掘調査によって，当該地には豊臣期天守台（詰ノ丸）の石垣，虎口（こぐち）などが地下に残されていると想定される。城郭への出入口のあり方を規定する虎口構造の解明は，城郭の発展段階を示す最重要の指標とされており，その解明は切望されているところである。また地中物理探査では，近世大坂城の本丸御殿（礎石）の検出も期待される。

研究メンバーは，以下の通り。仁木　宏，岸本直文，

木村義成（文学研究科），谷　直樹（生活科学研究科），三田村宗樹，山口　覚，奥平敬元（理学研究科），松尾信裕（大阪城天守閣），趙哲済（大阪文化財研究所），新谷昭夫（大阪市立住まいのミュージアム），北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所）。

・運営会議

日時：2011 年 7 月 25 日（月）10:40〜12:10

会場：文学部会議室

・第 1 回勉強会

日時：2011 年 9 月 24 日（土）13:00〜17:00

会場：キャンパスポート大阪（大学コンソーシアム大阪）

報告：岸本直文「大阪城の石垣石について」，仁木　宏「大阪城（大坂城）略史」

・地中物理探査（レーダ探査）

日時：2011 年 9 月 27 日（火）〜29 日（木）

場所：大阪城天守閣南側広場一帯

12 月以降，9 月の探査結果の報告会（勉強会），ボーリングコア資料の調査，石垣レーザー測量などを予定している。

なお，本プロジェクトは，2011 年 3 月締結された，市立大学と（財）大阪市博物館協会（大阪城天守閣・大阪文化財研究所などを含む）との包括連携協定にもとづく，「研究」分野での最初の連携事業としても位置づけられている。

アーカイブス事業（萬年社コレクションの整理調査）

石田佐恵子（文学研究科教授，常任研究員）

当事業は，2009 年度から開始され，大阪市立近代美術館建設準備室の協力の下，萬年社コレクションのビデオ・テープ類および紙・印刷資料類の調査研究を進めている。2011 年度は，大阪市立大学都市問題研究，および大阪市立大学新産業創生研究の資金援助を得ている。その他，吉田秀雄記念財団研究助成金（2009—2010 年度），外部研究寄付金（（株）毎日エス・ピー・シー）（2010—2011 年度），科学研究費補助金（データベース作成事業：京都精華大学との共同研究）（2010—2011 年度），公益信託高橋信三記念放送文化振興基金（2010—2011 年度）による研究費によって作業を進めてきた。

2011 年度上半期までの進捗状況は，以下の通り。

Ⅰ．今年度の調査研究プロジェクトの着手

2011 年 1 月までに，紙・印刷資料の整理と目録作成が，ポスター類を除きほぼ完了した。企業別ファイル，大型古資料の他に，社史資料 16 箱 610 点，博覧会・イベント関係 11 箱 312 点，広告作品・スクラップ 2 箱 57 点，日常営業活動資料 13 箱 364 点などが確認された。この紙・印刷資料の目録データベースについて，2011 年度中の公開を予定している。

科学研究費補助金（データベース作成事業・2011 年度）では，前年度に引き続き，テレビ CM を中心にデジタル化作業を進め，データベースとして追加公開すべく整理中である。

また，各種資料のより詳細な調査を進め，その一部を展示会（2012 年 1 月予定）形式で発表していくことを計画中である。

Ⅱ．報告書の刊行

過去 2 年間の文書及び印刷資料の整理と調査，フィルム・テープ・ビデオ類の目録データベースの作成，デジタル化と整理，関係者へのインタビュー調査，プロジェクト報告会の開催について，詳細を報告書にまとめ刊行した。『萬年社コレクション調査研究プロジェクト　2010 年度報告書』（2011 年 3 月，大阪市立大学）

吉田秀雄記念財団研究助成金の研究期間終了に伴い，同財団向けに，研究成果の報告を行った（土屋礼子）。この詳細は，『吉田秀雄記念事業財団　助成研究集　平成 22 年度』（2011 年 6 月，公益財団法人　吉田秀雄記念事業財団）に記載の通り。

Ⅲ．研究成果の発表

科学研究費補助金（データベース作成事業：京都精華大学との共同研究，2010 年度）により，データベースを作成し，WEB での公開を行った。詳しくは，日本学術振興会 HP を参照。

（http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/13_seika/database_koukai_h22/index.html）

【萬年社コレクション調査研究プロジェクト　共同研究者】

土屋礼子（早稲田大学政治経済学術院教授・大阪市立大学客員教授）

菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室）

竹内幸絵（大阪メディア文化史研究会代表・大阪市立大学非常勤講師・大阪市立大学都市文化研究センタードクター研究員）

調査整理作業研究補助者：大阪市立大学文学部学生・文学研究科院生・卒業生等，延べ 23 名。

上方文化講座 2011〈生写朝顔話〉

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

2011 年度の上方文化講座は，現在の文楽でも頻繁に上演される名作『生写朝顔話』に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として，竹本津駒大夫，鶴澤清介，桐竹勘十郎の三師を迎え，文学研究科教員とともに，8 月 24 日から 26 日までの 3 日間（連日 9:30〜16:00），大阪市立大学学術情報総合センター大会議室を会場にして，人形浄瑠璃文楽や『生写朝顔話』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募者多数の中から抽選で選ばれた一般市民約 100 名と，学生約 50 名が受講。授業内容は以下の通り。

8 月 24 日（水）

Ⅰ　時代と世話（久堀裕朗・大阪市立大学）
Ⅱ　『生写朝顔話』解説（久堀裕朗）
Ⅲ　島田・大井川の文学史（小林直樹・大阪市立大学）
Ⅳ　「喪明之泣」（村田正博・大阪市立大学）

8 月 25 日（木）

Ⅰ　『生写朝顔話』〈四段目〉講読（久堀裕朗）
Ⅱ　浄瑠璃の言語（丹羽哲也・大阪市立大学）
Ⅲ　『生写朝顔話』―太夫・三味線の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介）
Ⅳ　『生写朝顔話』―太夫・三味線・人形の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

8 月 26 日（金）

Ⅰ　近世大坂の芝居町（塚田孝・大阪市立大学）
Ⅱ　琵琶記から秦香蓮へ（松浦恆雄・大阪市立大学）
Ⅲ　桐竹勘十郎師に聞く―実演をまじえて（桐竹勘十郎）
Ⅳ　文楽の至芸―太夫・三味線・人形，三業一体の舞台（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

『都市文化研究』編集委員会

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

①2011 年度委員

川野英二（文学研究科准教授，社会学）
久堀裕朗（文学研究科准教授，国語国文学，編集委員長）
佐賀　朝（文学研究科准教授，日本史学）
祖田亮次（文学研究科准教授，地理学，14 号編集主任）
滝沢　潤（文学研究科准教授，教育学）
長谷川健一（文学研究科講師，ドイツ語フランス語圏言語文化学）
平田茂樹（文学研究科教授，東洋史学）
イアン・リチャーズ（文学研究科准教授，英語英米文学）

②昨年度からの変更

・編集主任　佐伯大輔（2010 年度）→祖田亮次（2011 年度）
・投稿規定／執筆要項：従来，執筆資格など投稿に関する規定も，投稿原稿の書式など執筆・原稿提出に当たっての要項も，「執筆要項」という名称で一括した形となっていたが，両者を分けて整理し，新たに「投稿規定」と「執筆要項」を定めた。

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

山﨑孝史（文学研究科教授，常任研究員）

UCRC オンライン電子ジャーナル UrbanScope は 2010 年 6 月 1 日に刊行された。第 1 号に関する，2011 年 5 月 31 日までの 1 年間のアクセス・ダウンロードデータは以下の通りである。第 2 号は 2011 年 6 月 1 日に刊行され，現在第 3 号を編集中である。また，2011 年度に向けて編集委員会内規を制定し，組織体制を整備した。

訪問回数：1,037
ページビュー数：2,390
訪問別ページビュー数：2.30
直帰率（訪問者が最初の訪問ページのみ見てサイトを離れる割合）：57.96％
平均サイト滞在時間：00:01:35
新規訪問の割合：55.64％
地域別訪問回数（28 カ国，1,037 回）
　日本 865，米国 81，英国 11，オーストラリア 10，タイ 10 など
論文別ダウンロード（クリック）回数
エディトリアル 217，塚田孝論文 392，小林直樹論文 346

科学研究費申請を支援する事業

滝沢　潤（文学研究科准教授，常任研究員）

昨年度に引き続き，UCRC ドクター研究員や文学研究科教員等の若手研究者を主対象とした研究条件の向上策の一環として，科学研究費補助金申請対策講座を実施

した。今年度は，下記の日程で，審査員経験者，採択経験者の先生 3 名による講座を開催した。いずれの講座も 10 名程度の参加者があり，申請者書作成のポイントや審査の実態などについて，ご担当の先生から丁寧かつ貴重な情報，アドバイスをいただき，大変有意義な機会となった。

科研審査員経験者からの申請書作成のポイントについてのお話

小林直樹先生　2011 年 10 月 5 日（水）16:20〜17:50（文学部会議室）

石田佐恵子先生　2011 年 10 月 19 日（水）12:20〜13:30（経済研究所棟　522 教室）

採択経験者からの科研申請書作成のポイントについてのお話

仁木 宏先生　2011 年 10 月 13 日（木）18:00〜19:30（文学部会議室）

ドクター研究員による研究プロジェクト

佐伯大輔（文学研究科准教授，UCRC 副所長）

UCRC では，すべてのドクター研究員に研究費を支給するのではなく，希望する研究員から申請を受けつけ，すぐれた研究プロジェクトに資金援助することで若手研究者の研究支援を行っている。

2010 年度は，下表の 9 件を採択した。文学研究科長裁量経費や重点研究より支援を得，各プロジェクトに対して 100,000 円を上限に支給した。この金額で足りない場合には自己負担とした。

それぞれの研究プロジェクトは，ドクター研究員が研究代表者となり，他のドクター研究員や院生・学生を研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置しているが，プロジェクトの遂行はあくまでドクター研究員自身によるものである。

各プロジェクトの詳しい内容と成果については，別掲の「2010 年度ドクター研究員プロジェクト成果報告」を参照。

2011 年度は，下表の 8 件を採択した。予算，体制などは 2010 年度までと同じである。

各プロジェクトの詳しい内容と成果については，別掲の「2011 年度ドクター研究員プロジェクト中間報告」を参照。

表　2010 年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	日本古代の墓誌の再検討	牧　飛鳥★	栄原永遠男
2	日本近世における流通と地域社会についての研究　―近世大坂を中心に―	羽田真也★ 三田智子 山下聡一	塚田　孝
3	軍記史料『細川両家記』の畿内戦国期史料としての再設定に向けた歴史学的総合研究　―戦国期畿内都市史研究の一環として―	古野貢★ 村井良介 藤本誉博	仁木　宏
4	イギリス帝国における植民地教育政策の系譜　―両大戦間期・英領ゴールド・コースト植民地での教育政策の位置づけ―	桑島　穏★	大黒俊二
5	多層化する「監視」と現代社会　―グローバル化／都市空間／メディア―	松井広志★	石田佐恵子
6	旧「萬年社」所蔵資料と出版物の調査に基づいた関西の広告史研究	竹内幸絵★	石田佐恵子
7	ルクセンブルク語コイネー研究会	田原憲和★ 齊藤公輔	神竹道士
8	ポストモダンの身体表現と重力の意味作用に関する研究	野田はるか★	小田中章浩
9	上海租界をめぐる中国人学生の国際移動に関する研究　―旧大阪商科大学を事例に―	佐藤　量★	中川　眞

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの

表　2011 年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	日本古代墓誌の再検討2	牧　飛鳥★	栄原永遠男
2	古代末期エジプトにおける宗教的対立とその社会的影響	貝原哲生★	井上浩一
3	戦間期における軍のプロパガンダと世論―「記念日講和」関係資料を事例に―	中嶋晋平★	石田佐恵子
4	日本ポピュラー文化におけるモノ化とそのグローバル・シティへの拡大　―香港における展示イベントを事例に―	松井広志★	石田佐恵子
5	旧「萬年社」所蔵資料と出版物調査に基づいた関西の広告史研究	竹内幸絵★	石田佐恵子
6	学習の共同化に関する実証的研究　―授業における子どもの文化の交流に着目して―	上森さくら★	湯浅恭正
7	ルクセンブルク語コイネー研究会	田原憲和★ 齋藤公輔	神竹道士
8	戦前上海における中国人への日本語教育政策	佐藤　量★	中川　眞

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの

2010 年度ドクター研究員プロジェクト成果報告

1. 牧　飛鳥「日本古代の墓誌の再検討」

本プロジェクトでは，日本古代に作られたものとして出土した墓誌を研究することを目的としている。指導教員は栄原永遠男，研究協力者は稲田奈津子・遠藤慶太・

小倉久美子，研究代表者は牧飛鳥である。現地調査を2回，研究会を1回，計3回の活動を行い，詳細は以下のとおりである。

現地調査の第1回は，2010年11月23日に石川年足墓（大阪府高槻市）のほか，周辺遺跡を巡った。調査地は，石川年足墓誌出土地・年足神社→阿久刀神社（式内社）→嶋上郡衙跡→今城塚古墳→新池埴輪製作遺跡（新池ハニワ工場公園）→太田茶臼山古墳（継体天皇陵）→太田廃寺，である。参加者は稲田・遠藤・小倉・牧の4名であった。

墓誌出土地近辺は，巨大古墳が築かれ，郡家が置かれたり式内社が存在するなど，古代において長く地域の中心となっている。それらの地をやや見下ろすように位置する墓誌出土地の環境がよく確認できた。

第2回調査では，同年12月6日に小野毛人墓（京都府京都市）および周辺遺跡について行い，祟道神社・小野毛人墓→祟道神社御旅所（おかいらの森）→祟道神社里堂→宝幢寺，を稲田・小倉・牧の3名で周った。

宝幢寺は，小野毛人の墓誌が出土後に一時保管されており，祟道神社御旅所は古代瓦の散布地であり，祟道神社は早良親王を祀っている。

以上の現地調査では，墓誌が埋納された前後の時期の周辺環境も含めた調査とすることで，墓誌出土地の理解をより一層深めることができた。

石川年足墓誌出土地・小野毛人墓は，ともに周辺の住民により，現在も祀られている点が特徴的である。

研究会は，2011年1月22日にテーマを「日本古代の墓誌の再検討」と設定して，大阪市立大学で開催した。報告者と報告題目は，牧飛鳥「日本古代墓誌の概要」・稲田奈津子「日本古代墓誌の系譜」・遠藤慶太「石川年足の墓誌と願経」・小倉久美子「平安時代における副葬の実態」であり，参加者全員による討論を行った。参加者は，報告者のほか指導教員など4名を含む計8名であった。

討論では，氏族の本貫地と墓誌出土地が相違する場合が多いこと，改葬が多い点が指摘された。本貫地と埋葬地の関係，古代における改葬の在り方はどうであったのかが，今後明らかにされるべき課題として浮かび上がった。

本プロジェクトの成果として，研究会においてこれまで日本では注目されてこなかった韓国の古代の墓誌について稲田奈津子が取り上げ，その際に中心となった論文を翻訳し，『都市文化研究』14号に掲載予定である。これまで日本と中国の墓誌の比較は行われてきたが，朝鮮半島のものはほとんど顧みられておらず，今後取り上げていくべき内容として注目すべきである。

2. 羽田真也「日本近世における流通と地域社会についての研究 ―近世大坂を中心に―」

近年の日本近世史では，流通の問題を生産地・中継地・消費地それぞれの地域社会構造に即して捉え直そうとする研究が著しく進展している。それは，領主的・特権的流通構造と農民的・非特権的流通構造との対抗関係として描かれてきたかつての流通像を根本的に見直す作業でもある。こうした動向を牽引している一人が原直史氏（新潟大学）である。現在，大阪市大近世史研究会では流通に関する研究を進める大学院生が多い。この点も踏まえ，本プロジェクトでは，研究代表者の羽田真也（D研究員）を中心に，研究協力者（三田智子，山下聡一［以上，D研究員］，久角健二，齊藤紘子［以上，日本史学専修・後期博士課程］，島崎未央，ヤニック・バルディ［以上，同・前期博士課程］）などで勉強会を組織し，原氏の主要論文を精読してその成果を検討したうえで，原氏を招いて研究会を開催することにした。

9月1日に第1回の勉強会を開催した。参加者は10人であった。三田智子氏が，原氏の著書『日本近世の地域と流通』（山川出版社，1996年）の序章「地域と流通」，および論文「流通史研究の新展開」（『歴史評論』564，1997年）を題材として，原氏の研究の展開と研究史との関係について整理した。そして，その内容について議論するとともに，今後の勉強会の進め方に関しても話し合った。

第2回の勉強会は10月20日に行った。このときは，とくに報告者は立てずに，江戸・浦賀・大坂の干鰯市場に関する論文「市場と問屋・仲買―江戸・東浦賀・大坂の干鰯市場を中心に―」（斎藤善之編『新しい近世史3 市場と民間社会』新人物往来社，1996年）について議論した。参加者は8人であった。

第3回の勉強会は12月8・15日に開催した。久角健二氏が，大坂の塩魚流通に関する論文「商いがむすぶ人びと―重層する仲間と市場―」（原直史編『身分的周縁と近世社会3　商いがむすぶ人びと』吉川弘文館，2007年）について報告した。ここでは，従来の研究に対する原氏の研究成果の画期性，流通史の分析方法，流通史と都市史・地域史・身分制研究との関係などについて議論した。参加者は8日が10人，15日は11人であった。

1月9日に原氏を招き，研究会「日本近世における流通と地域社会」を開催した。会場は大阪歴史博物館，参加者は18人であった。勉強会で議論を積み重ねてきたメンバーに加え，東京の大学の教員や院生なども参加した。三田氏が下総における陸上交通（駄賃稼ぎ）に関する研究，山下聡一氏が大坂の魚肥流通・産物会所に関する研究，久角氏が上述の塩魚流通に関する研究についてまとめ，原氏の研究をめぐる論点を抽出した。そして，原氏が報告に対するコメントを行ったうえで，羽田の司

会のもとで議論を行った。そこでは，流通にかかわる諸存在と相互関係，宿の位置付け，流通の自生的展開と権力的規制の関係，地域社会における流通の問題の重要性，流通の担い手と文化的の担い手との関係，社会実態の把握と史料論の関係など，多彩な議論が交わされた。

本プロジェクトの成果を何らかの形にすることは行わなかった。しかしながら，本プロジェクト参加者それぞれが流通史の成果と今後の課題について認識を深めることができ，今後の研究に多かれ少なかれ生かせるようになったことは間違いない。その意味で大きな成果があったと考えている。

3. 古野　貢「戦国期畿内都市史のための軍記史料『細川両家記』の有用性の研究 ―歴史学・考古学・国文学による学際的研究―」

1. 研究会，勉強会など

・これまで，収集してきた諸写本の校合，史料批判の作業を研究会形式で行ってきたが，開催が困難となったため，未検討であった加賀市立図書館蔵聖藩文庫本，尊経閣文庫本については，メンバーで分担し，分析済写本との校合作業，史料批判を継続した。

2. 調査など

・未入手の写本は所蔵先の承諾手続き未済などにより，数点残る。今後の課題である。

3. プロジェクト全体の成果・課題

・当初予定していた写本の校合作業については，未入手の数点を除き，ほぼ完了した。
・記述の正当性の裏付けとなる他の諸史料との比較検討，および『細川両家記』自体の史料批判についても，ほぼ完了した。
・『細川両家記』を利用するにあたって必要と考えられる「細川氏関係人名一覧」，「三好氏関係人名一覧」，「事項索引」などの添付資料は，約 5 割作成済。
・書誌学的検討，解題なども，5 割程度作成済。

4. 成果の公表について

・①写本の比較検討，書誌学的検討の結果，得られた情報を組み込んだテキスト版『細川両家記』の作成，
②読解，利用に有益な同時代史料一覧（＋テキスト史料），人名一覧，事項一覧，図，地図，解題など，
③検討の結果得られたさまざまな情報をもとに，メンバーが執筆した研究論文，の 3 点を柱とする報告書（『「細川両家記」の研究』（仮））を，和泉書院から刊行することが決定した。刊行予定は 2012 年頃の予定。

4. 桑島　穏「イギリス帝国における植民地教育政策の系譜 ―両大戦間期・英領ゴールド・コースト植民地での教育政策の位置づけ―」

(1) 研究発表・論文

研究発表

・桑島穏「両大戦間期のイギリス領ゴールド・コースト植民地における学校教育制度と教育カリキュラム―「帝国」・「植民地」・「原住民」を巡って―」，第 7 回アフリカ史研究会，於関西大学，2010 年 7 月。
・Yasuki Kuwajima, “The education reform and some colonial elites in the British Gold Coast Colony during the 1920s: The meaning of ‘collaborators’ under colonial orders”, in *the 1st Finnish-Japanese workshop for doctoral students in history and economics, publishing your research abroad: possibilities and challenges*, University of Jyväskylä, Finland, September 2010.
・2010 年 9 月よりイギリス・バーミンガム大学西アフリカ研究センターの修士コースに留学中，コースの一環として研究発表を実施（2011 年 3 月，2011 年 10 月）。
・African Studies Association of the UK 年次大会（2012 年 9 月）での研究発表を予定。

論文

・桑島穏，小林和夫「〈書評論文〉イギリス帝国から世界システムへ―John Darwin, *The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System 1830-1970*, Cambridge, 2009 をめぐって―」，『パブリック・ヒストリー』第 8 号，大阪大学西洋史研究室，2011 年，105－116 頁。
・Masters thesis（provisional）titled ‘Prempeh College and socio-economic development in late colonial Asante’（イギリス・バーミンガム大学に 2011 年 12 月提出の予定）.

(2) 成果と課題

・これまで，研究プロジェクトにおいて計画していた資料をほぼ全て収集し，分析してきた。収集してきた資料を分析する中で，教育政策における植民地現地住民の主導性，あるいは現地の政治・経済・社会構造とその変化が学校教育の発展と相互に関係し変化をもたらしている実態を解明し，新たな知見を得ることができた。その成果は，現在執筆している修士論文（バーミンガム大学に提出）に結実する予定である。
・今後の課題として，ガーナ現地においてインタビュー等の資料収集が必要であると考えている。

5. 松井広志「多層化する＜監視＞と現代社会 ―グローバル化／都市空間／メディア―」

グローバル化と情報テクノロジーの発展のなかで，近年「監視」（surveillance）をキーワードとした研究が盛んである。しかし，現代の監視状況は，グローバルなセキュリティ強化の動向，都市空間内での監視の実践，それらの動きを媒介するメディアとの関わりといった多層

化した位相で進行しているため，容易に捉えることはできない。このような問題意識から，監視社会について研究を発表・共有する場として研究会を開催し，関西圏の新進気鋭の研究者を招聘した。そこでは，各講師の専門領域と関心から監視社会化の諸相を捉えた報告をしてもらい，参加者とともに議論を交わした。

【第 1 回研究会】 2010 年 7 月 31 日　於：大阪市立大学文化交流センター

タイトル：「監視社会と自由のシステム―創造性／自発性／祝祭」

報告者：鈴木謙介（関西学院大学社会学部准教授）

内容：本報告では「商業空間における監視」を題材に，消費者と従業員，それに空間の管理と管理が論じられた。まず，監視の分類のうち，対象を望ましい方向に差し向ける「促す監視」として，消費をめぐる現象が位置づけられた。次に「消費者の管理」を問題視する G. リッツァと，「消費者の多様性」を肯定する A. ブライマンの議論が対比された。そして，消費空間での「劇場的パフォーマンス」が要求される従業員の監視の問題が指摘され，最後に，「祝祭空間」として演出された消費環境における監視と管理システムの意味が提示された。その後の議論では，M. フーコー流の主体形成につながる近代型監視と D. ライアン流のデジタル化された情報の管理による現代的監視と本報告の関係や，現代的な監視の延長線上に見えてくる「人に優しい環境」が，いかなる条件の上に成り立っているのかについて意見が交わされた。

【第 2 回研究会】 2010 年 8 月 25 日　於：大阪市立大学文化交流センター

タイトル：「監視と（脱）欲望」

報告者：柏原全孝（追手門学院大学社会学部准教授）

内容：本報告では，データ監視の時代において，D. Bell が主張したような「反監視としてのエロティシズム戦略」について，その有効性が検討された。まず，ピーピングトムや安部公房『箱男』などを手がかりに窃視が，ウェブカムやリアリティ TV を事例に露出が概念的に整理された。次に，盗撮と窃視の相違をふまえたうえで，ローグギャラリーや ID カードなどに見られる盗撮と監視の顔志向とそこでの欲望のあり方が論じられた。さらに，映像に関する知見を監視研究にも向ける可能性が示唆され，最後に，エロティシズムによる監視のハイジャックが進んだとき，監視の目的であるセキュリティとの関係が希薄化するのかについて考察された。その後の議論では，近年盛んであるヴァナキュラー写真論との接続や「監視」概念の再検討が議論された。

研究会の参加人数は 2 回とも 10 人ほどであったが，当該分野や関連する周辺領域の研究者が複数参加しており，議論は従来「監視社会論」と呼ばれてきた領域を超えたものとなった。そのため，現代社会における「監視」を考えるうえで一定の成果をもたらしたといえる。

なお，本研究会の問題意識のひとつである「メディアと監視社会の関係性」に関する論考を，『市大社会学』で発表した（松井広志，2011，「監視／防犯カメラ映像のテレビ番組における利用―社会的分類と他者表象」『市大社会学』12）。同様に，関連する内容の学会報告を国際学会において発表した（MATUI Hiroshi, 2011, “Surveillance and Voyeurism: Through the change of social meaning of *Tousatsu* in Japan”, 16th World Congress of the International Society for Criminology.）

6. 竹内幸絵「旧「萬年社」所蔵資料と出版物の調査に基づいた関西の広告史研究」

プロジェクト概要

報告者は 2010 年度，黎明期関西の広告に着目した広告史研究を，研究協力者を組織して行ってきた。研究の中心軸は 1989 年に大阪に創業し広告産業の成立に重要な足跡を多く残した「萬年社」の活動の探求である。これを本年は，「1，1999 年の倒産時に残された未公開の紙資料群の調査」，「2，同社が戦前から発刊していた広告研究書の調査」，「3，存命の同社 OB へのインタビュー」という 3 つの基礎研究の形で進展させた。

①萬年社所蔵未公開紙・印刷資料の調査

膨大なダンボールの開封を 4 月から開始，概要把握作業を行った。これに 3 ヶ月を要したが，明治期創業期 1890 年代のものも多く含む多彩な資料であることが判明。

7 月に，広告資料整理を早くから行っている「（財）吉田秀雄記念事業財団　アド・ミュージアム東京」を訪問。同館収蔵庫の見学と，企画学芸室戸松恭子氏との面談を実施。広告資料の保存・整理方法とデータベース整備の課題について意見交換した。様々な大きさや形，印刷形式を持つ広告紙資料の収蔵には工夫を要すが，同館実地見学は，目録化の指針を決めるにあたって大変参考になった。データベース化項目や，企業名の記載方法も参考になった。

8 月にはこの知識に基づき目録化の分類，整理手法を決定。以降資料整理を進めた。11 月末には目録を完成し，12 月 4 日（土）第二回萬年社コレクション調査研究プロジェクト報告会（公開形式）にて，「萬年社コレクションの紙・印刷資料の概要と整理状況」として報告した。（於：大阪市大文化交流センター・ホール，参加者 70 名）

【完成目録の総数】：大型古資料 152 冊，9441 点，社史資料 16 箱 610 点，博覧会•イベント関係 11 箱 312 点，広告作品・スクラップ 2 箱 57 点，日常営業活動資料 13 箱 364 点

②萬年社が戦前発刊していた広告研究書，雑誌に着目した調査

現在散逸し，まとまってみることが出来ない同社発刊の論集『広告論叢』（1923 年～1971 年）の戦前分全巻を入手。簡易に研究利用に供するためこれを PDF 化し，報告者が組織している研究会のメンバーに提供。以降の共同研究に活用する基盤とした。さらに①の紙・印刷資料の調査の過程で発見された 1930 年刊同社社史（社内版全 5 冊，印刷部数 2 部のみ。）も，戦前広告史研究に非常に有用であるため，PDF 化作業を行った。本年度はこれらの資料をも参照しながらメンバーに報告いただく研究会を，以下 2 回開催した。

（1）2010 年 7 月 16 日（金）：「1940 年代の写真雑誌の統廃合」報告者：日本カメラ博物館運営委員白山真理氏（於：早稲田大学，参加者 6 名）

（2）2010 年 11 月 15 日（月）：「初期『広告年鑑』にみる萬年社の事業活動の意義―『広告論叢』研究の手がかりに」「同社戦前出版物『広告論叢』の分類提案」報告者：京都外国語大学井上祐子氏（於：関西学院大学梅田キャンパス：参加者 11 名）

③同社 OB へのインタビュー

3 月に行ったインタビュー原稿の起こし（2 名分）を実施。ご本人の校正の後，最終文字校正し『萬年社コレクション調査研究プロジェクト 2010 年度 報告書』に掲載した。

1 年間のプロジェクト全体の成果，課題

萬年社所蔵資料の目録が完成し全容が確認できたこと，それらの資料の一部を利用した研究を研究会開催という形で進展させたことは，本年度の大きな成果である。インタビューとあわせこれらを報告書としてまとめることも出来た。しかし目録から踏み込んだ詳細な資料調査は手付かずだし，研究会による体系だった関西の広告史研究には至ってない。

本プロジェクトによる基礎研究の成果を，専門分野の異なる研究メンバーの多角的な視点から分析・検討し，関西の広告史研究の基礎情報となるべく活動を継続していきたい。

7. 田原憲和「ルクセンブルク語コイネー研究会」

本プロジェクトでは 2010 年 9 月 8 日に研究会を開催し，12 月 25 日には機関紙である『ルクセンブルク学研究』の刊行に至った。以下，それぞれの詳細について報告する。

ルクセンブルク語コイネー研究会

大阪市立大学文化交流センターにおいて研究会を開催した。今回は「文化と記憶」という共通のテーマのもとで 4 人が研究発表を行った。詳細は以下のとおりである。

平成 22 年（2010 年）9 月 8 日　於：大阪市立大学文化交流センター

報告 1：田原憲和（UCRC ドクター研究員・研究代表者）「ディックスと体育協会」，報告 2：小川　敦（招待講師：一橋大学）「言語イデオロギーの対立から考える国民意識－1984 年言語法前のルクセンブルク－」，報告 3：田村建一（愛知教育大学）「The Dialect of Wiltz in a Luxemburgish Drama for Children: With the Sample Text of “Den Zauberer vun Oz”（2005）」，報告 4：齊藤公輔（UCRC ドクター研究員・研究協力者）「集合的記憶と文学受容―メディアの発達を中心に―」

本研究会では，「文化と記憶」という共通のテーマのもとで 4 人が研究発表を行った。それぞれ，「歴史と文化を通じ共通の記憶を創出する作業について」（田原），「単一言語性と多言語性の対立について」（小川），「方言劇における言語と文化のずれについて」（田村），「近代の文学受容における集合的記憶の役割について」（齊藤）という観点からの報告であった。その内容は一般的な理論研究から具体的な事例報告まで多岐にわたった。それぞれの報告後に行われたディスカッションでは，「記憶」についての議論が中心であった。議論を通じ，報告者ならびに参加者の間で，「記憶」という概念を導入することにより「文化」ないしは「（国民）意識」といったおぼろげで抽象的なものをより直感的に認識することが可能となるが，これを理論的に説明する際には注意が必要であるという認識を共有することができた。

『ルクセンブルク学研究』第 1 号

平成 22 年（2010 年）12 月 25 日発行，75 頁

論文 1：田原憲和（UCRC ドクター研究員）「思想としてのルクセンブルク語」，論文 2：田村建一（愛知教育大学）「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」，論文 3：小川　敦（一橋大学）「ルクセンブルクにおける言語イデオロギー―1970 年代から 1984 年言語法以前に関する考察―」

今回掲載された論文はいずれも本研究会における成果に基づくものであり，ルクセンブルク語形成の歴史的過程とその背景（田原），多民族共生国家における学校教育上の諸問題について（田村），言語法制定以前のルクセンブルク語に関する言説からみるナショナリズム（小川）に重点を置いた論文であった。

本プロジェクトの全体的な成果については上記の『ルクセンブルク学研究』第 1 号に論文として掲載している。それ以外の研究発表，成果報告については以下のとおりである。

田原憲和「いわゆる受容者受動構文について」，2011 年 3 月 31 日，大阪市立大学ドイツ文学会第 45 回研究発表会

齊藤公輔「過去意識の変化とメディア―ホロコースト描写を中心に―」，2011 年 7 月 3 日，阪神ドイツ文学会第

206 回研究発表会

8. 野田はるか「ポストモダンの身体表現と重力の意味作用に関する研究」

【研究協力者】小菅隼人教授（慶応義塾大学），古田敦子（いいむろなおきマイムカンパニー）

①プロジェクトの概要

本プロジェクトでは，土方巽（1928-1986）の暗黒舞踏とエチエンヌ・ドゥクルー（Étienne Decroux, 1898-1991）のコーポリアル・マイム（corporeal mime）を比較することによって，ポストモダンの身体表現にどのような可能性がもたらされたのか，検討を行なうことを目的としていた。

具体的な調査活動は以下の通りである。

(1)「慶応義塾大学アートセンター内土方巽アーカイヴ」での調査

・第 1 回　2010 年 5 月 20 日，アーカイヴ所蔵の映像資料や文献の調査，及び同センター研究員森下隆氏へインタビュー

・第 2 回　2010 年 5 月 27 日，アーカイヴ所蔵の映像資料や文献の調査

(2)「第 28 回ペリグー国際マイム・フェスティバル」の視察

2010 年 8 月 2 日～10 日，フランスドルドーニュ県ペリグー市内の各会場等にて，同大会のパフォーマンス等の視察，運営会議の傍聴，関係者等へインタビュー

(3) 第一回コーポリアル・マイム研究会「コーポリアル・マイムに関する実践家と研究者のあり方について」開催

2011 年 1 月 29 日，大阪市内貸会議室「ユーズツウ」A 室にて

参加者：古田敦子（いいむろなおきマイムカンパニー），田中秀彦（iroNic ediHt DESIGN ORCHESTRA），金世一（東京大学・大学院生），野田はるか，以上四名

コーポリアル・マイムをはじめとする現代マイムについて各人のこれまでの活動の報告や，知識や見解等を実践家と交換

②プロジェクトの成果

(1) に関して

アーカイヴでしか見られない土方巽の舞踏の記録映像を実際に見られたことで，舞踏における「重力」の表象をより具体的に把握することができた。また森下氏より，舞踏研究の現状，また舞踏とマイム芸術の繋がりについて，興味深い情報と示唆を頂くことができた。

(2) に関して

パフォーマンスとしてのコーポリアル・マイムが最早主流を外れ，表象としての「重力」もマイムにおいては殆ど見られない（寧ろ同フェスティバル内で上演された舞踏やコンテンポラリー・ダンスにおいてみられた）等，海外のマイム芸術の現状を確認することができた。また同調査では，運営スタッフとの交流により，今後マイム芸術及びマイム・フェスティバルを存続させていく上での問題や戦略などを知ることができた。

(3) に関して

日本におけるコーポリアル・マイムの実践家また研究者が少ない中，それぞれの知識や経験を共有し，見解を交換する場を初めて設けることができた。コーポリアル・マイムにおける「重力」の哲学に関して，その重要性を確認できた一方，表象としての作用に関しては議論をつめることができなかった。

③プロジェクトの成果を報告した研究発表等

(1) 研究発表

・「モダニズムと異文化接触―ミーム・コルポレルの身体技法の独自性について」日本演劇学会，明治大学，2010 年 6 月 25 日

・“Butoh and Corporeal Mime: Alternative Thoughts on Modern Body”, International Federation of Theatre Research World Congress 2010, New Scholars Forum, Ludwig- Maximilians-University, July 28th 2010

・“Physical Restraint in Performances: Corporeal Mime and Butoh”, Turning Points of Art, Osaka City University, October 29th 2010

(2) レポート

・「海外でふれたマイムの世界」『都市文化研究』13 号，2010 年 3 月発行

④1 年間のプロジェクト全体の成果と課題について

本プロジェクトは，舞踏とコーポリアル・マイムの比較研究を軸としたものであった。だが，プロジェクト中，舞踏と（コーポリアル・マイムを含む）マイム芸術との親和性を確認しながらも，両パフォーマンスにおける表象としての重力について議論を深める決定的な糸口をみつけることができなかった。結果的にプロジェクトとしては大きな課題を残したが，コーポリアル・マイム研究という観点からみると，今後学術的な研究を続けていく上で，貴重な示唆を多く得ることができたように思う。

9. 佐藤　量「上海租界をめぐる中国人学生の国際移動に関する研究 ―旧大阪商科大学を事例に―」

<u>学内における資料調査</u>

大阪市立大学大学史史料室（学術情報総合センター 6 階）にて資料調査を実施した。同室には，大阪市立大学の前身である，大阪高等商業学校（1901～1928），大阪商科大学（1928～1949）時代の貴重な一次資料が保管されている。参照した資料は以下の通りである。『大阪市

立高等商業学校一覧』（大正 10 年 10 月），『大阪商科大学学則　附昭和 4 年度学生募集要項』（昭和 3 年 12 月），『大阪市立大学一覧』（昭和 7 年 5 月）。これらの資料から，旧制大阪商科大学へ留学した上海出身の中国人留学生が複数確認され，戦前上海と大阪を結ぶネットワークの一端が明らかとなった。

上海におけるフィールド・ワーク

ROV 若手研究者海外派遣により，2011 年 1 月 7 日～3 月 19 日にかけて中国上海市でフィールド調査を実施した。滞在中は上海師範大学中国近代社会研究中心訪問学者として研究に従事した。

①資料調査

おもに上海档案館と上海市図書館にて実施した。戦前上海の共同租界，フランス租界，華界の学校教育状況について，1920 年代～1940 年代にかけての資料を収集した。

②研究ネットワーク構築

上海租界研究の第一人者である東華大学人文学院陳祖恩教授およびその学生とともに，上海市内の歴史地区を巡検した（2/1，3/15）。また，上海大学民俗学系陳志勤准教授とともに，上海市近郊の紹興市における祭礼調査および研究者会議に出席した（2/5～7）。

③研究報告

上海滞在中に研究報告を実施した。華東師範大学学語学院唐権准教授の授業内にて，「近代中国人留学生に関する問題」と題した報告を実施した（3/17・於華東師範大学学語学院）。

2011 年度ドクター研究員プロジェクト中間報告

1. 牧　飛鳥「日本古代墓誌の再検討 2」

本プロジェクトは，昨年度に引き続いて行うものであり，近畿を中心に分布する古代の墓誌を，出土地も対象として検討する。墓誌に触れる研究では，多くの場合はその記述内容のみを扱い，出土地にはあまり言及していないためである。

昨年度のプロジェクトでは，現地調査を墓誌が埋納された前後の時期の周辺環境も含めた調査とすることで，墓誌出土地の理解をより一層深めることができた。開催した研究会では，墓誌の出土地と被葬者の本拠が一致しない例が多いことが指摘されており，研究史においても埋納地の立地についての充分な検証が行われているとはいえない状況が課題として浮かび上がった。

本年度の計画は，周辺遺跡を含めた現地調査を下草等が少なくなる 11 月から 12 月にかけて 2 回行う。参加者は招聘研究者の稲田奈津子・遠藤慶太・小倉久美子の三氏および牧であり，現在は日程を調整している途中である。

調査地としては，行基墓・美努岡万墓（奈良県生駒市）および高屋枚人墓・紀吉継墓（大阪府南河内郡太子町）を予定しており，あわせて周辺遺跡も周る予定である。

行基墓と美努岡万墓は数百メートルの距離にあり，周辺遺跡として往馬座伊古麻都比古神社（生駒神社）や，行基が開基との伝承がある竹林寺・龍華山円福寺，竹林寺古墳がある。

高屋枚人墓と紀吉継墓も近在しており，16 ある墓誌のうちで年紀が最も新しい 2 点である。周辺は古墳が多く営まれた地域であり，叡福寺や近つ飛鳥博物館・風土記の丘，科長神社・小野妹子墓がある。

本年度も現地調査によって，実際の墓誌埋納地の立地を確認し，氏族の本拠地との違いについてもさらに検討を加える。

なお，成果については調査報告を『都市文化研究』に投稿し発表する予定である。

2. 貝原哲生「古代末期エジプトにおける宗教的対立とその社会的影響」

研究代表者：貝原哲生，研究協力者：なし，指導教員：井上浩一

本プロジェクトの目的は，アレクサンドリアに端を発し，古代末期とりわけ 5 世紀半ばから 7 世紀前半のエジプトを席巻した宗教的対立について，その実態と社会的影響を分析することにある。

ここで言う宗教的対立とは 451 年のカルケドン公会議を契機とするキリスト教徒の宗派間対立であり，同公会議を支持するカルケドン派とこれを否認するするいわゆる単性論派との不和は，6 世紀後半に後者が今日のコプト教会に至る新たな教会組織を構築したことでひとつの画期を迎えた。

研究史上，単性論派分離教会の成立は時の経過とともに深刻化の一途をたどった両派の敵対関係の絶頂と位置づけられ，また，エジプト住民の大半は単性論に傾倒し，カルケドン派を支持したのは一部大都市の限られた高級官僚や在地有力者に過ぎないとされた。

だが，それは一面的な理解と言える。先行研究で主に用いられている史料は，当時，教義論争の最前線であったアレクサンドリアや首都コンスタンティノープルの文筆家の著作であり，必ずしもエジプト全土の実情を反映したものではない。

本プロジェクトでは，既存の研究では軽視されてきたパピルスならびに陶片文書を積極的に利用し，宗教的対立が地方レベルでどのように受容され，当該社会にいか

なる変化をもたらしたか，を考察する。

分析対象として設定したのは（1）上エジプト・テーバイ（現在のルクソール）西岸ならびに東岸地域，（2）エジプト中部のファイユーム・オアシス，（3）双方の中間に位置するアンティノエとその周辺地域，である。これら三地域は中核となる都市の規模や宗教的対立の表れ方に差異があり，比較するうえで好対照をなすと言える。

研究代表者は9月1日から同27日までの日程でエジプトへ赴き，現地調査を実施した。滞在中は，9月5〜6，21〜22，25〜26日にカイロのフランス東洋考古学研究所にて文書史料の収集にあたった。また9月4日にファイユーム・オアシス，同9日にルクソール西岸地区，10日にルクソール近郊のナガーダ村，11日にソハーグ，12日にキフト（コプトス），13日にアルマント，15日に聖パウロ修道院および聖アントニオス修道院，19日に聖メナス修道院，20日にワディ・ナトルーンを訪問し，実地調査を行った。

今後は現地ならびに国内で収集した史料を整理し，それぞれの地域における宗教的対立とその社会的影響に関して比較分析を進める。それにより，エジプト住民を単純にひとつの集団として捉える従来的見地を越えて，一方で各々の地域的特徴を，他方で共通項を明らかにすることができると考える。

なお，この作業を通じて得られた研究成果は，論文にまとめたうえ，『西洋史学』に投稿する予定である。

3. 中嶋晋平「戦間期における軍のプロパガンダと世論 —「記念日講和」関係資料を事例に—」

①プロジェクト概要

本プロジェクトは，戦間期に海軍当局によって実施された海軍記念日における講話に関する資料を収集・分析することで，海軍による宣伝活動の実態を明らかにするとともに，第一次世界大戦後に発生し，新聞などのマスメディアで盛んに主張された国際協調や国際平和，反軍国主義といった理念が，当時の民衆にどのように理解されていたのかをその要因も含めて考察する。こうした作業を通じて，戦間期の世論の形成過程を，政策決定者（軍），民衆，マスメディアの相互作用のなかから明らかにすることを目的とする。

②調査

海軍記念日の講話に関する資料を含む海軍公文備考は，防衛省防衛研究所に所蔵されているが，現在ではアジア歴史資料センターのHP上からダウンロードすることが可能となっている。そこで昨年行った予備調査に基づき，初めて海軍記念日講話が定式化された1910（明治43）年から3年分の資料と，本プロジェクトの対象時期である戦間期のうち，すでに収集済みである1924（大正13）年を除いて，1920年から1925年までの資料を収集した。資料の合計はA4サイズの用紙で4561枚に及ぶ。

また，これら収集済みの資料は順次データ化を進めており，1910年と1923年のデータ入力が完了している。

③プロジェクト全体の予想される結果

満州事変以降，とりわけ日中戦争以降は，情報局のような軍と政府を中心とした宣伝機構によって，戦意高揚のための宣伝や言論統制などが徹底的に行われたことはすでに知られている。また，第一次世界大戦における戦争形態の変化，すなわち戦争の総力戦化が，軍に国民の自主的な戦争協力を引き出すための宣伝の重要性を認識させ，その組織化を促したことも周知の事実である。

しかし，第一次世界大戦後から満州事変に至るまでの間，すなわち，戦間期において軍がそうした宣伝機構をどのように整備，運用していたのかについては，あまり研究が進められていない。戦間期は陸海軍ともに軍縮が実施されるなど，軍にとっては受難の時代であったとされているが，そうした時代であったからこそ，軍にとっては国民の軍事や戦争，国際関係に対する認識や理解の程度を正確に把握し，世界情勢と絡ませながら自らの存在価値を効果的に宣伝する方法を，試行錯誤を繰り返しながら整備していったと考えられる。海軍の記念日講話に関する資料からは，こうした戦間期の軍による宣伝活動の一端を読み解くことができる。

④発表

本プロジェクトの資料の一部を用い学会での口頭発表を行った。

・中嶋晋平「戦間期におけるワシントン体制と「世論」—海軍の『記念日講話』関係資料を事例に—」，関西社会学会第62回大会，甲南女子大学，2011年5月28日

4. 松井広志「日本ポピュラー文化におけるモノ化とそのグローバル・シティへの拡大 —香港における展示イベントを事例に—」

①研究目的

本研究は「ポピュラーカルチャーにおけるモノ」をめぐる人々の活動の論理をグローバルな文脈で読み解くことを目的とする。

キャラクターグッズや模型などの立体物をはじめとした「物体的なモノ」（material object）の受容は従来，資本主義における「商品」として論じられることが一般的であった。さらに1970年代以降のポストモダン理論においては，ポピュラーカルチャーにおけるそれらの「モノ」は，情報消費社会における差異の体系として「記号」を消費するひとつの表れとして位置づけられてきた。

しかし，2000年代以降の物質文化論においては，記号に還元されない「物質性」に固有の位相を捉える動き

があり，また社会学では，人々の「記憶」が保存・想起される物的環境としてモニュメントやミュージアムを考察する研究が盛んである。本研究はこれらの議論をポピュラーカルチャーに応用することで，従来の「記号」に加えて，「物質性」や「記憶」といった側面からも「ポピュラーカルチャーおけるモノ」を捉えようとするものである。このような理論枠組を提示した論文を著者は投稿論文として提出したが，今後の課題として経験的水準での調査研究が必要である。その調査研究の一端として位置づけられるのが，本プロジェクトとなる。

②調査内容

上述の枠組から「C3 日本動玩博覧会」を対象とする調査を行う。本博覧会のもととなった日本の「C3×HOBBY」は，キャラクターグッズ・フィギュア・模型などを展示するイベントとして国内最大級のもので，1992 年より開催されてきた。これが，直接的には東アジア地域における日本のコンテンツの人気の流れを受け，2009 年より香港でも開催されるようになった。

本博覧会は，日本国経済産業省や香港政府関係機関が後援していることからもわかるように，これまで経済的利益を生むコンテンツ産業の展開といった経済的観点からのみ語られることが多かった。しかし，本調査では，単なる日本のコンテンツの人気の理由やその産業的意味だけではなく，グローバル化におけるポピュラーカルチャーの混交というより広い社会的文脈を念頭において，上述の「ポピュラーカルチャーにおけるモノ」をめぐる活動を記号・物質・記憶という 3 つの側面から読み解くことを目指す。

③調査成果

今年度における「C3 日本動玩博覧会」は 2012 年 3 月 9 日から 11 日に開催されるため，中間報告原時点ではまだ開催前である。現在その調査に向けての準備として，調査項目や調査日程などの詳細を決定しているところである。この成果の内実は次年度の「プロジェクト成果報告」に記すとともに，投稿論文としてまとめることを予定している。

5. 竹内幸絵「旧「萬年社」所蔵資料と出版物調査に基づいた関西の広告史研究」

①プロジェクト概要

報告者は，D 研究員プロジェクトとして昨年に引き続き，黎明期関西の広告に着目した広告史研究を行っている。

研究の中心軸は，大阪に創業し 1999 年に歴史を閉じた広告代理店「萬年社」である。重要な足跡を多く残した「萬年社」の倒産時所有資料の整備を進めつつ，これを基礎資料として，モダニズム期関西の広告研究を研究協力者と共に進めていく。

②研究会報告

以下 2 度の研究会を開催した。

(1) 2011 年度第一回研究会　日時：2011 年 4 月 18 日（月），於：大阪市立大学梅田サテライト　文化交流センター小セミナー室，参加者 10 名，テーマ：「里見宗次の商業美術観について―萬年社広告論叢 24 輯と 29 輯にあった里見宗次の書いた記事を中心に」，報告者：熊倉一紗（同志社大学大学院，京都造形芸術大学非常勤講師）

概要：里見宗次は大戦間期フランスで活躍した日本人広告デザイナーである。萬年社は，帰国時に記念講演を開催，氏に記念誌の装丁を依頼するなど関係が深い。今回熊倉からは，大阪出身の里見が渡欧後デザイナーとして活躍するまでの動向を調査した結果が報告された。これまで認識されてこなかった里見という類例のない人物の軌跡と萬年社との関係から，関西発の広告史の一断面を見直すことが出来た。

(2) 2011 年度第二回研究会　2011 年 8 月 1 日（月），於：関西学院大学大阪梅田キャンパス 14 階 1407 号室，参加者 11 名，テーマ：「日本製プロパガンダ・ポスターに見られるデザイン的傾向に関する考察―昭和館所蔵作品を中心として―」，報告者：田島奈都子（姫路市立美術館　学芸員）

概要：第二次世界大戦期の日本のポスターの研究は皆無といってよい。それは物資不足から多くは作られなかったという思い込みと，戦後，戦時への反省から当時の制作物が隠蔽されてきた事情にも起因する。今回田島からは，この固定観念を覆す研究成果が報告された。ポスターは国威高揚を狙った様々な機会に制作され，多くは国家を依頼主としたものだった。萬年社資料からも内閣情報部に招聘された記録が発見されており，本研究会で，国家宣伝に関する民間と国家との関係について研究展開が期待されることが確認できた。

③プロジェクトの予想される成果

萬年社を軸として，モダニズム期大阪（関西）の広告の活況を，秀でた個人クリエーター，あるいは，戦時プロパガンダという特異な状況下での広告といった，研究協力者それぞれの視点から深めつつある。年内開催予定の 3 度目の研究会は，初期萬年社の出版事業調査を軸に行う。同社の活動の特色を探り，日本の広告発展に残した足跡を検討する予定である。これら多角的な視点から，本プロジェクトが，関西の広告史研究の基礎情報となることを期待している。

6. 上森さくら「学習の共同化に関する実証的研究 ―授業における子どもの文化の交流に着目して―」

【研究会】

・第 1 回　テーマ：国語教育における共同の追求につい

て，期日：6 月 4 日，会場：大保連センター，参加者：湯浅恭正，久田俊彦，船越勝，福田敦志，平田知美，今井理恵，上森さくら，議論内容：国語教育における共同の追求のあり方を比較することを確認。比較対象の選定

・第 2 回　テーマ：「読み研」の特徴，期日：6 月 28 日，会場：大保連センター，報告者：平田知美，上森さくら，参加者：湯浅恭正，久田俊彦，船越勝，福田敦志，今井理恵，議論内容：「読み研」における共同追求の特徴を明らかにした。

・第 3 回　テーマ：牛島実践における詩の授業の特徴と「語り合う会」との相違，期日：7 月 22 日，会場：大保連センター，報告者：上森さくら，参加者：湯浅恭正，久田俊彦，船越勝，福田敦志，平田知美，今井理恵，議論内容：牛島実践における授業及び佐藤学の理論の特徴を析出し，「語り合う会」との相違を明らかにした。

・第 4 回　テーマ：「語り合う会」の特徴と庄司実践について，期日：8 月 23 日，会場：大保連センター，報告者：平田知美，今井理恵，参加者：湯浅恭正，久田俊彦，船越勝，福田敦志，上森さくら，議論内容：「語り合う会」の共同追求の特徴を明らかにした。

・第 5 回　テーマ：「語り合う会」の特徴と庄司実践について，期日：9 月 5 日，会場：大保連センター，報告者：平田知美，今井理恵，参加者：湯浅恭正，久田俊彦，船越勝，福田敦志，上森さくら，議論内容：前回に引き続き「語り合う会」の共同追求の特徴を明らかにした。

【調査】

9 月 30 日　秋田大学附属小学校にて国語教育実践のデータ収集と教師へのインタビューを行った。生活と国語教育の交わりにおいて都市と比較するデータが得られた。

【発表】

・上森さくら「生活指導における教師の成長―信念の深化に焦点を当てたライフヒストリー的研究―」日本教育方法学会第 45 回大会（於：秋田大学）にて発表

・今井理恵，上森さくら，長瀬美子，久田俊彦，平田知美，福田敦志，船越勝，湯浅恭正「文学の読みの指導を介した学習の共同化―授業指導の論点整理を中心に―」日本教育方法学会第 45 回大会（於：秋田大学）にて発表

【今後の調査予定】

・大阪の小学校における教室空間の使い方のデータ収集（交渉中）

・大阪・京都・神戸の教師へのインタビュー調査（1 月 7・8 日）

【全体成果の予想】

文学の読みの授業に焦点を当て，文学の読みの授業における共同化の論点について次の三点を導き出した。第一には，文学作品の文脈に即しながら，自己の生活現実のコンテクストに立脚して読んでいくという読みの当事者性である。二には，自己の自立（生き方）の物語を批判的・共同的に問い直す当事者性である。第三には，作品の解釈を新しく解釈しなおす当事者性である。

生活現実から子どもが学校へ抱えてくる文化を，作品の解釈を共同的に新しくしていく授業を通じて，どのように問い直すかということ，またどのような方向に導こうとするかという論点を提起できるものであると予想している。

また，生活指導における共同の追求についても加えて成果を示すことができると考える。

7. 田原憲和「ルクセンブルク語コイネー研究会」

研究代表者：田原憲和，研究協力者：齊藤公輔，招待講師：小川　敦

2011 年度の本プロジェクトにおいては，研究会の開催と論文集『ルクセンブルク学研究』第 2 号を発行する予定である。研究会は既に開催済みであり，論文集も 12 月発行に向け準備が進められている。以下，それぞれの内容についての概要を説明する。

研究会について

ルクセンブルク語コイネー研究会（参加者：8 人）

2011 年 7 月 23 日（土）　大阪市立城北市民学習センター

報告 1：田原憲和（UCRC ドクター研究員）「ディックスによる言語創出への試み―ルクセンブルク語拡充の原行為―」，報告 2：田村建一（愛知教育大学）「ルクセンブルクのポルトガル系生徒をめぐる言語状況」，報告 3：小川　敦（招待講師：一橋大学）「ルクセンブルクにおける国民意識と言語―第二次世界大戦から 1984 年の言語法まで―」，報告 4：木戸紗織（大阪市立大学大学院）「Wie die luxemburgische Bibel den heutigen Zustand des Luxemburgischen in der Triglossie beeinflusst」

今回は「多言語都市（国家）における言語と言語意識の相対化」という共通テーマのもとで報告が行われた。ドイツ語並びにドイツ文化からの脱却によるルクセンブルク語創出の試み（田原），ルクセンブルク最大の外国系住民であるポルトガル人生徒をめぐっての諸問題（田村），ルクセンブルクの国民意識並びに言語意識醸成過程における志向の絶対化と相対化（小川），ルクセンブルク語聖書がルクセンブルクの三言語並存（トリグロシア）にどのような影響を及ぼしうるか（木戸）という観点からの報告であった。

論文集について

タイトル：「ルクセンブルク学研究」（Studia Luxemburgensia）2 号，ルクセンブルク語コイネー研究会会報

掲載論文：「Versuch zur Sprachherstellung von Dicks―die Vorarbeiten zum Ausbau des Luxemburgischen―」（田原憲和），「人口変動と言語の関係―ルクセンブルク・

イデオロギーの視点からの考察」（小川　敦），（研究ノート）「三言語併用社会におけるルクセンブルク語訳聖書―『Evangeliar』序文翻訳―」（木戸紗織）

『ルクセンブルク学研究』第 2 号には上記の論文が 2 本，研究ノートが 1 本の掲載が予定されている。この論文集は国内外の研究機関や個人研究者に配布を予定しており，これによって UCRC 並びに本プロジェクトの成果を広く公開できるものと思われる。

8. 佐藤　量「戦前上海における中国人への日本語教育政策」

本研究は，戦前上海における中国人への日本語教育政策について考察することを目的とする。これまで本研究では，1949 年の新中国建設やその後の中国近代化において，戦前期の占領体験がどのような影響を及ぼしたかを考察するために，上海における上海教育史関係資料の収集・分析を中心に進めてきた。以下はその成果内容である。

調査

本プロジェクトにおける上半期の仕事は，資料収集が中心である。2011 年 8 月 4 日から 9 月 1 日にかけて上海調査を実施し，上海市図書館および上海市档案館にて資料を検索・閲覧・複写した。上海市档案館では，新聞，雑誌，学校機関誌，上海市図書館では，行政統計書，新聞，雑誌などを収集した。収集した具体的な資料は以下の通りである。

上海市档案館

- 『敬中期刊』档案番号：D2-0-2033
- 『東青通訊』日華学会（東京）第 17 期中華民国 25 年 1 月 30 日（1936 年）　档案番号：U120-0-410-42
- 『留日学生消夏団報告書』日華学会（東京）1925 年 7 月 20 日～8 月 26 日　档案番号：U120-0-410-1
- 『留日学生学報』第 1 巻第 1 号，第 2 号（1922 年―1923 年）　第 1 号档案番号：D2-0-1596
- 「中国留美学生成功之要素問題之陳述」『新教育』（第 6 巻第 1 期，1923 年 1 月）　档案番号：D2-0-1671
- 「留日学制為日対華文化案警告書；万国教育大会之説案」『中華教育界』（第 12 巻 11 期，1923 年 6 月）　档案番号：D2-0-1938
- 「打倒犬化教育」『南洋』（第 7 巻第 10 号，1926 年 1 月 10 日）　档案番号：D2-0-1503
- 「反帝教育新動向」『世界与中国』（第 2 巻第 4，5 期，1932 年 5 月 1 日）　档案番号：D2-0-2969
- 「日本帝国主義在中国的亡教育」『鉄血』創刊号（1933 年 10 月 20 日）　档案番号：D2-0-2863
- 『申報年鑑』1936 年「教育文化および留学生出国状況」档案番号：Y15-1-42
- 『上海特別市教育統計　民国 29.30 年度合刊』上海特別市教育局第 3 科編，民国 31 年 12 月（1942 年）档案番号：Y8-1-1416

上海市図書館

- 上海市教育局編『上海市教育統計：中華民国 21 年，22 年度合刊』上海市教育局　民国 23 年 1934 年
- 中華民国駐日留学生監督処編『中華民国駐日留学生監督処一覧』中華民国駐日留学生監督処（東京）　民国 18 年　1929 年
- 上海新聞社『1933 年之上海教育』
- 海外留学―委員会編『留学指南』海外留学―委員会（南京）　民国 23 年　1934 年
- 一球中国学生会編『留学指南：一球中国学生会特刊』球中国学生会（上海）　民国 24 年 1931 年

研究会参加

2011 年 6 月 18 日に，日本大学（於・東京・水道橋）にて開催された上海史研究会に参加した。

本研究会の参加目的は，①研究発表，②今後の共同調査日程の打ち合わせであったが，①は，研究会の事情により私の発表は延期となった。

②については，2012 年 2 月下旬に，東京と関西の上海史に関する研究会が合同で上海調査を実施することが決定した。上海史研究会（東京／代表・高綱博文教授）と大陸新報研究会（関西／代表・大橋教授）は，これまで単独で研究をすすめてきたが，今後は合同で定例研究会や調査を実施することになった。

2012 年 2 月下旬の上海調査では，私が昨年度に上海でお世話になった東華大学上海史研究グループ（代表・陳祖恩教授）とともに合同研究会を開催予定である。

今後の予定

本プロジェクト研究の下半期のおもな仕事は，収集してきた資料の分析である。統計書についてはエクセルデータにまとめ，表・グラフ化する作業を進める。また，新聞，雑誌，学校機関誌などの文字資料は，おもに日本語教育される側の言説であるため，収集してきた 1920 年代から 30 年代にかけての言説がどのように変化したのか，また変化していないのかについて，経年的に分析していく。下半期の調査予定については上述したとおりである。

2011 年度ドクター研究員一覧

	氏　名	指導教員	テーマ
1	オカムラ トシフミ 岡村　俊史	仲原　孝	文化研究のアクチュアリティについての解釈学的分析
2	オグサ ヤスシ 小草　泰	美濃　正	われわれの文化的理解はわれわれの知覚経験にどのように影響するか
3	タナカ ダイスケ 田中　大介	栄原　永遠男	日本古代都城における市の構造と変遷
4	マキ アスカ 牧　飛鳥	栄原　永遠男	大阪地域を中心とする陵墓等を事例とした文化財の現状についての研究 —古代日本における贈位制および墓誌に関する研究—
5	タケウチ リョウ 竹内　亮	栄原　永遠男	日本古代都城および周辺地域における寺院の社会的機能の解明
6	イザキ フミヒコ 伊崎　文彦	塚田　孝	法学者・佐々木惣一の思想史的研究 —憲法制定前後—
7	ニシオ ヤスヒロ 西尾　泰広	塚田　孝	近現代日本の地域社会構造に関する研究 —南王子村・八坂町の19～20世紀—
8	ヤマシタ ソウイチ 山下　聡一	塚田　孝	近世都市大阪における塩の流通構造 —専売制と問屋仲間—
9	ミタ サトコ 三田　智子	塚田　孝	近世畿内かわた村の村落構造と地域社会 —泉州南王子村の19世紀を中心に—
10	ハダ シンヤ 羽田　真也	塚田　孝	日本近世における地域社会構造と都市性の展開
11	サイトウ ヒロコ 齊藤　紘子	塚田　孝	近世泉州の山間地域における山用益と地域社会構造の解明
12	アマノ タダユキ 天野　忠幸	仁木　宏	戦国織豊期における城郭及び城下町における交流
13	フルノ ミツギ 古野　貢	仁木　宏	中世後期守護諸氏の権力構造と地域拠点支配についての研究
14	ナガタ タクジ 永田　拓治	井上　徹	漢晋期における荊州 —出土資料と文献史料の併用の可能性をさぐる—
15	ムロヤマ ルミコ 室山　留美子	井上　徹	古代中国の都市・地域文化 —考古資料および石刻史料の分析を中心に—
16	ハッポウ 八宝	井上　徹	清朝とジェブツンダンバ・ホトクト
17	アナザワ ショウコ 穴沢　彰子	平田　茂樹	小説史料からみた宋代都市の人間関係
18	ズシ ノブタダ 図師　宣忠	大黒　俊二	中世南フランス都市における文書利用と異端審問
19	キムラ ヨウコ 木村　容子	大黒　俊二	中世後期イタリア都市における説教実践 —説教作成を中心に—
20	ナカヤ ソウ 中谷　惣	大黒　俊二	中世後期イタリア都市における司法の動態的研究
21	クワジマ ヤスキ 桑島　穣	大黒　俊二	1930-40年代のイギリス支配下アサンテにおけるココア生産農民と学校教育 —都市における中等学校設立の動きを巡って—
22	ムラカミ モトキ 村上　司樹	大黒　俊二	中世スペイン教会の都市形成力
23	ハヤカワ ミアキ 早川　美晶	井上　浩一	モルドヴァ地方の教会堂壁画、通称＜コンスタンティノープル包囲＞（16世紀）の研究
24	カイバラ アキオ 貝原　哲生	井上　浩一	古代末期上エジプト社会における宗教的対立とその影響
25	マエダ ミツヒロ 前田　充洋	北村　昌史	第二帝政期ドイツにおけるクルップ社の装甲板の対外商業政策 —国内における海軍との価格設定交渉との比較から—
26	ヨネオカ ダイスケ 米岡　大輔	北村　昌史	ハプスブルグ統治下ボスニアにおけるムスリム知識人と教育問題への取り組み
27	ナカジマ シンペイ 中嶋　晋平	石田　佐恵子	戦間期におけるワシントン体制と世論 —海軍の『記念日講話』関係資料を事例に—
28	マツイ ヒロシ 松井　広志	石田　佐恵子	日本のポピュラー文化におけるモノ化と集合的記憶をめぐる社会学的研究
29	タケウチ ユキエ 竹内　幸絵	石田　佐恵子	モダニズム期以降の関西の広告史研究 —『萬年社』資料整備と共同研究—
30	アキカゼ チエ 秋風　千恵	石田　佐恵子	障害とジェンダー
31	ワタナベ タクヤ 渡辺　拓也	川野　英二	建設労働を対象とした下層労働の社会学的研究
32	ソラマ ミチコ 空間　美智子	伊藤　正人	都市部の子どもにおける自己制御の発達的変化
33	ミヤザキ ゲンタ 宮崎　弦太	池上　知子	都市的対人関係がもたらす社会的拒絶への耐性 —友人関係の単一送信性と友人相互の地理的距離の相乗的影響—

	氏　名	指導教員	テーマ
34	ムカイ 向井　有理子（ユリコ）	池上　知子	外国人受容の促進要因としての都市地域住民の心的特徴の検討
35	タバタ 田端　拓哉（タクヤ）	池上　知子	社会的アイデンティティの複雑化とレジリエンス —都市的環境がもたらす移動性との関連—
36	アダチ 足立　邦子（クニコ）	池上　知子	都市化の程度の差がもたらす思考スタイルの比較文化研究
37	ヤダ 矢田　尚也（ナオヤ）	池上　知子	都市的心性としての競争志向性と対人認知様式 —社会的比較感情理論に基づく検討—
38	アライ 新居　佳子（ヨシコ）	池上　知子	都市文化としての大学における教育のための、思考の研究
39	ウエモリ 上森　さくら	湯浅　恭正	子どもの文化と教師の役割 —公共の立ち上げに着目して—
40	マツバラ 松原　仁美（ヒトミ）	水内　俊雄	フランス地域総合就労支援における伴走活動の役割に関する研究
41	キタガワ 北川　眞也（シンヤ）	山﨑　孝史	都市のシティズンシップの構築 —イタリアにおける場所をめぐる政治の諸相—
42	ヤスエ 安江　枝里子（エリコ）	山﨑　孝史	現代日本における観光地景観の形成と身体的実践としての観光 —愛知県足助町を事例として—
43	アダチ 足立　匡敏（マサトシ）	村田　正博	近代短歌の発生と展開 —地方における結社・雑誌を視野にいれて—
44	タカシゲ 高重　久美（クミ）	村田　正博	平安朝の和歌の研究 —能因を中心に—
45	オウ 王　秀梅（シュウバイ）	丹羽　哲也	古代日本の言語生活をめぐって —類義字の字訓対応に見る日本語語義・語法の変遷—
46	ヤブザキ 藪崎　淳子（ジュンコ）	丹羽　哲也	現代日本語の助詞
47	リュウケイ 劉　慶	久堀　裕朗	日本の古典演劇と中国古典との関わりについて
48	オウ 王　傑（ケツ）	山口　久和	16, 17世紀の明清初の都市文化、とくに湖北省の地方文化と知識人（紳縉）との関係
49	ヤマグチ 山口　博子（ヒロコ）	齋藤　茂	清代18世紀の中国における文人ネットワークと文化活動について
50	オクノ 奥野　みち子（ミチコ）	田中　孝信	トニ・モリスンの『ビラヴド』と『ジャズ』 —2人の女神でつながる「二部作」—
51	マスイ 増井　一弘（カズヒロ）	田中　孝信	現代英文学における第二次世界大戦を巡る表象と作家の記憶とトラウマをめぐって
52	タハラ 田原　憲和（ノリカズ）	神竹　道士	文化都市ルクセンブルクにおける共通語創出とその拡散について
53	サイトウ 齊藤　公輔（コウスケ）	神竹　道士	ライプツィッヒにおける旧東ドイツの記憶 —現代史フォーラムや秘密警察博物館を中心に—
54	チュウジョウ 中條　健志（タケシ）	福島　祥行	フランスの「暴動」を事例とした、メディアの談話研究
55	イシカワ 石川　優（ユウ）	三上　雅子	現代消費社会における女性による文化流用に関する研究 —ポピュラーカルチャーから生成される「二次創作」に着目して—
56	シバタ 芝田　江梨（エリ）	三上　雅子	モダン都市大阪における「舞踊」の発展とその影響、またその過程で生れた身体文化の考察
57	サトウ 佐藤　量（リョウ）	中川　眞	戦前上海における学校教育と対敵協力者
58	キタジマ 北島　由紀子（ユキコ）	野崎　充彦	朝鮮半島における神話と現代社会 —神話と教育について—
59	マツダ 松田　いりあ	石田　佐恵子	消費空間におけるメディア／消費空間としてのメディアに関する社会学的研究
60	カゲヤマ 景山　佳代子（カヨコ）	川野　英二	都市における介護者と職業生活についての日仏比較研究
61	ヒロセ 広瀬　美千代（ミチヨ）	湯浅　恭正	都市における福祉教育の実践とその課題に関する研究 —小学校、高校教員への聞き取り調査から—
62	エトウ 江藤　高志（タカシ）	村田　正博	『古今和歌集』の批評意識
63	タケウチ 竹内　一高（カズタカ）	寺井　俊正	19世紀前半のベルリン、そしてウィーンでの文学活動 —アイヒェンドルフを中心として—
64	アリタ 有田　豊（ユタカ）	福島　祥行	ペリッチェ谷Val Pelliceにみるヴァルド派の独自性について
65	カネコ 金子　祐樹（ユウキ）	野崎　充彦	17世紀初頭の朝鮮における道徳観念の諸相 —官撰教科書と「伝」資料を中心に—